



26



32



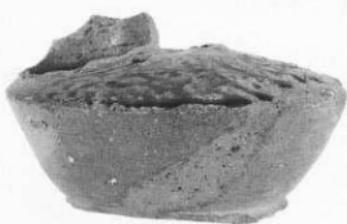
27



33



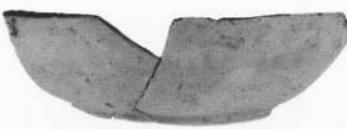
28



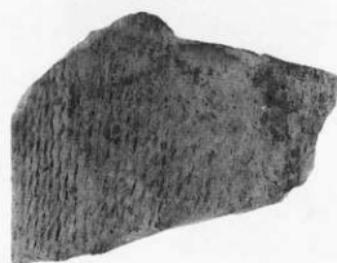
34



30



37



39



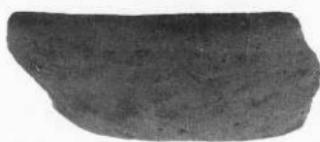
S D 106出土遺物



44



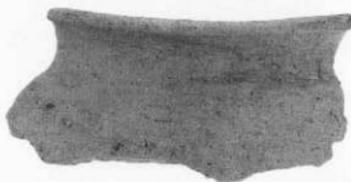
50



45



51



47



48



53



第3面

第4層 (44・45・47・48・50・51・53)、第3面出土遺物

IV 久宝寺遺跡第55次調査（K H2003-55）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では北亀井町3丁目)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で、平成15年度に実施した竜華東西線1-1工区(北)掘削工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第55次調査(KH2003-55)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受け実施したものである。
1. 現地調査は平成16年1月19日～2月20日にかけて二宮(旧姓金親)満夫(現、宮崎県教育委員会)が担当した。調査面積は308m<sup>2</sup>である。現地調査においては、伊藤静江・垣内洋平・加藤邦枝・田島宣子・永井律子・若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成17年11月～平成18年3月に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測・図面トレースー山内千恵子、図面レイアウトー坪田真一、遺物写真撮影ー垣内が行った。
1. 本書の執筆・編集は、調査終了報告書を基にして坪田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力を受けた。  
独立行政法人都市再生機構西日本支社、北工業(株)、(株)アート
1. 自然科学分析・測量については下記の機関に委託した。  
【木製品の樹種同定】パリノ・サーヴェイ(株)  
【航空写真測量】(株)かんこう
1. 本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式・古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式・古相・新相)に区別した。当該期の土器縦年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(原田1993)に従った。
1. 土器の形式・縦年および検出遺構で参考とした文献については、125頁に提示した。

## 本　文　目　次

第1章 調査に至る経過 .....	117
第2章 調査概要 .....	118
第1節 調査の方法と経過 .....	118
第2節 基本層序 .....	119
第3節 検出遺構と出土遺物 .....	121
第3章 まとめ .....	125

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 .....	117
第2図 調査区設定図 .....	118
第3図 基本層序 .....	120
第4図 第1面平面図、第3面平面図・遺構断面図・遺物出土状況図 .....	122
第5図 畦畔301出土遺物 .....	123
第6図 1・16層出土遺物 .....	124

## 図 版 目 次

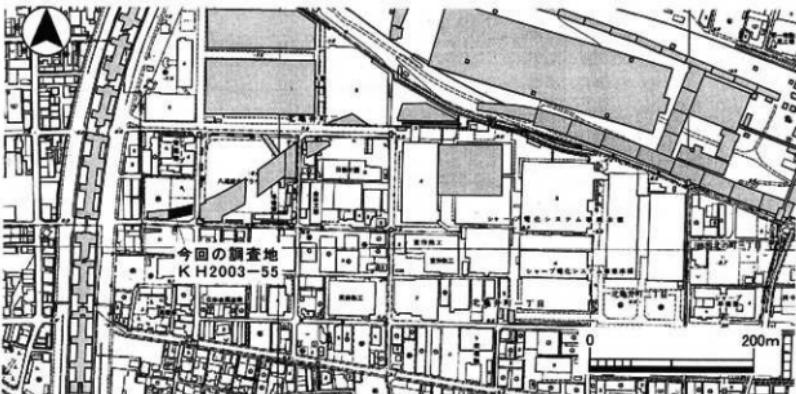
図版一 調査地より東方を望む 第1面	図版五 畦畔301東部南壁 畦畔301内土器(1)出土状況
図版二 第2面 同上	図版六 北壁15層内板材出土状況 16層出土木製品(3)出土状況
図版三 第3面 同上	図版七 畦畔301、16層、1層、15層出土遺物
図版四 水田301・畦畔301 同上	

## 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた三角州上の微高地に位置する縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市西部の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井町・渋川町の東西1.8km、南北1.7kmがその範囲とされている。

今回、久宝寺遺跡第55次調査を実施した久宝寺遺跡南西部においては、北亀井町3丁目で実施した第1次調査(KH84-1)、第9次調査(KH91-9)、第37次調査(KH01-37)で古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)の居住域や墓域が検出されている。平成9年度以降は旧国鉄竜華操車場跡地の再開発に伴う調査が実施されており、第22次調査(KH97-22)では弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構・遺物が検出されている。また調査地東側では平成10～12年度に第25次調査(KH98-25)、第36次調査(KH2000-36)を実施しており、古墳時代初頭(庄内式期)・古墳時代中期の畠状遺構・水田といった生産関連遺構が検出されている。そして南西側で平成14年度に実施した第46次調査(KH2002-46)では、周辺では事例の少ない奈良～平安時代の遺構が検出された。これらの発掘調査の結果から遺跡範囲南西部では、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が重層的に検出され、沖積低地に特有の河川堆積物の累重により形成された不安定な微地形を積極的に活用した、各時期の集落の拡張が確認されている。なお地理・歴史的環境の詳細については「本書I 第2章」を参照されたい。

本書で報告する久宝寺遺跡第55次調査(KH2003-55)は、竜華東西線1-1工区(北)建設に伴って実施した発掘調査である。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、都市基盤整備公団関西支社、(財)八尾市文化財調査研究会による業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。



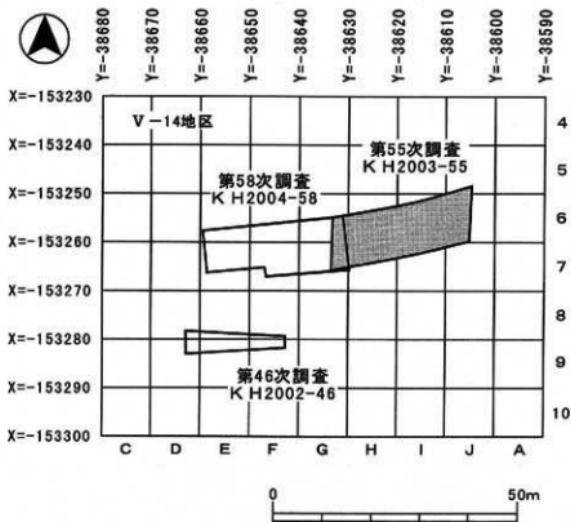
第1図 調査地位置図 ( $S=1/6000$ )

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地とその周辺で計画された「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の竜華東西線1-1工区(北)建設に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第55次調査である。調査地点は竜華操車場跡地の西側に位置しており、竜華東西線に伴う第25次調査3調査区から西への延長部分にあたる。調査地平面形は東西に長い平行四辺形(東西28.8~29.2m、南北10.8~11.2m)を呈し、調査面積は287m<sup>2</sup>を測る。

調査区全域の地区割については、竜華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第VI系〔日本測地系〕(原点一東經136°00'、北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区画(I~VIII)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をVIIIと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1~25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区的呼称については、東西方向はアルファベット(西からA~J)、南北方向は算用数字(北から1~10)で示し、1A地区~10J地区とした。なお個々の地点表記においては国土座標値を入れる方法を取った。(本書16頁参照)



第2図 調査区設定図 (S=1/1000)

調査は鋼矢板打設により調査区を囲繞する方法をとり、調査区の四方に土層観察用のセクション(幅0.5m)を設定している。

調査に際しては、遺跡範囲確認調査の結果から現地表下1.05m前後を機械掘削の対象範囲とし、以下約1.6mについては人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。

遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、2桁の番号と合わせて表記した。[凡例SD101]。

現地調査での平面図の作成については、2回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)を実施した。

## 第2節 基本層序

機械掘削範囲内であったため現地表下1.15~1.4mまでの地層に関しての詳細は不明である。しかし布設された整地土約1.0mを除去すると旧耕土(層厚約0.12m)が見られることを機械掘削段階で確認している(0層)。

その下層である1層は古代~中世作土層で、中粒砂質シルトで構成された2層は古代~中世の生活面となる。6層は洪水砂層である。11層は西部の46次調査で検出された河川埋土と同一の堆積であるが、本調査地東部で薄れて行く。その河川が埋没した後に堆積した8~10層上面で第1面(古代)を検出した。12~14層は水成堆積であるが、14層上面は水田面であった可能性がある。15層は草が腐らざりそのままの状態で残り、ラミナ状の炭化物を幾重にも含む層で、西部の近畿自動車道での調査事例から古墳時代中期の生活面を覆う鍵層となっている。16層は非常に汚れた層で、炭酸鉄・斑状炭化物を含む粘土質シルトで構成され、その上面を第2面とした。本調査区で遺構等は検出されなかったが、東部の第25・36次調査では相当層において水田面が検出されている。17~22層はシルト質粘土~粘土質シルトを主体とする水成堆積層で、植物遺体や炭化物が見られる。26~28層は砂の混じる粘土質シルトで構成される。土壤化が進んでおり、非常に汚れている。また28層は、粘土質シルトのブロックを含むことから盛土である可能性がある。これらの地層上面で第3面(古墳時代前期後半の生産域)を検出した。29・30層は炭酸鉄を多く含むシルト質粘土~粘土質シルトの層で、調査区の北部にのみ存在する。31層は中~粗粒砂で、河川堆積を示す。

0層：整地土・旧耕土

1層：7.5Y4/2灰オリーブ色中粒砂~細礫混極細粒砂。古代~中世の作土層。層厚0.25m以上。

2層：2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂質シルト。斑状炭化鉄、マンガン斑を含む。層厚0.1~0.3m。

上面は土壤化しており、古代~中世の遺構面を形成。

3層：2.5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂混シルト。マンガン斑を含む。層厚0.25m以上。

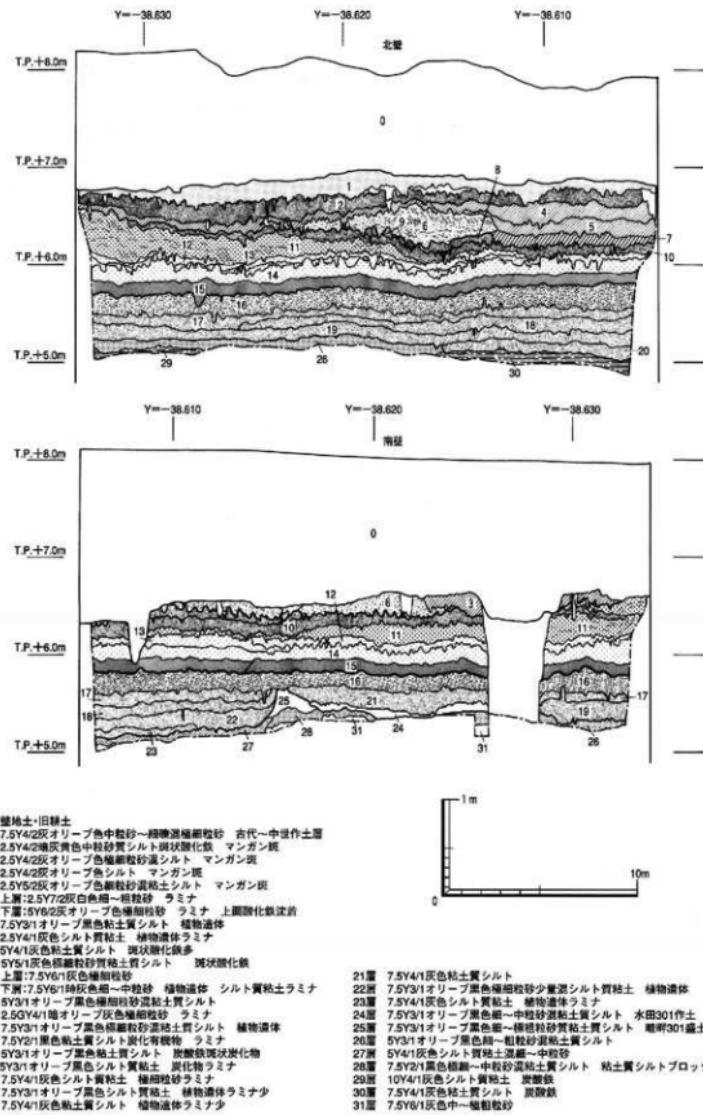
4層：2.5Y4/2灰オリーブ色シルト。マンガン斑を含む。層厚最大0.2m。

5層：2.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂混粘土質シルト。マンガン斑を含む。層厚0.1~0.2m。

6層：上層：2.5Y7/2灰白色細~粗粒砂。下層：5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂。下層の上面に酸化鉄の沈着。上下層ともにラミナあり。層厚最大0.4m。

7層：7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。植物遺体を含む。層厚約0.1m。

8層：2.5Y4/1灰色シルト質粘土。植物遺体ラミナを含む。層厚約0.05m。



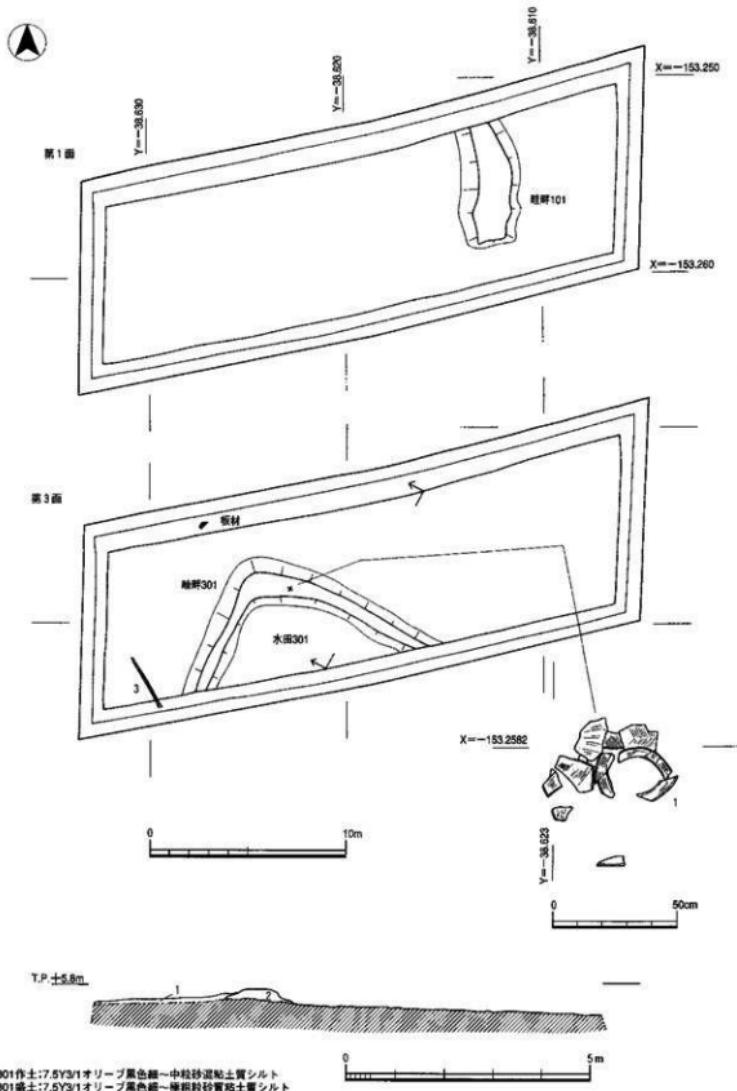
第3図 基本層序

- 9層：5Y4/1灰色粘土質シルト。斑状酸化鉄を多く含む。層厚約0.1m。
- 10層：5Y5/1灰色極細粒砂質粘土質シルト。斑状酸化鉄を含む。層厚約0.05m。
- 11層：上層：7.5Y6/1灰色極細粒砂。下層：7.5Y6/1灰色細～中粒砂。5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土のラミナ層あり。最下部に植物遺体ラミナあり。層厚最大0.5m。8～11層上面が第1面である。
- 12層：5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト。層厚0.05～0.1m。
- 13層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂。ラミナあり。層厚約0.05～0.1m。
- 14層：7.5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト。植物遺体を含む。層厚約0.2m。上面は水田面を形成している可能性あり。
- 15層：7.5Y2/1黒色粘土質シルト。幾重もの炭化有機物ラミナを含む。そのままの葦を多量に含む。層厚約0.1m。(板材を包含。)
- 16層：5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。炭酸鉄、斑状炭化物を含む。層厚約0.2m。上面が第2面。(布留式新相の土器、建築部材を包含。)
- 17層：7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。炭化物ラミナを含む。層厚約0.15m。
- 18層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。極細粒砂の細かいラミナを含む。(西に行くにつれラミナは薄くなる。)層厚0.1～0.15m。
- 19層：7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。植物遺体ラミナ少量含む。層厚0.1～0.15m。
- 20層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト。植物遺体ラミナ少量含む。層厚約0.1m。
- 21層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト。層厚最大0.2m。
- 22層：7.5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂少量混シルト質粘土。植物遺体を含む。層厚最大0.2m。
- 23層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。植物遺体ラミナを含む。層厚0.05～0.1m。
- 24層：7.5Y3/1オリーブ黒色細～中粒砂混粘土質シルト。水田耕土。層厚最大0.1m。
- 25層：7.5Y3/1オリーブ黒色細～極粗粒砂質粘土質シルト。畦畔301盛土。層厚最大0.2m。
- 26層：5Y3/1オリーブ黒色細～粗粒砂混粘土質シルト。(西に行くにつれ砂の量が少なくななる。)層厚0.1m以上。上面が第3面。
- 27層：5Y4/1灰色シルト質粘土混細～中粒砂。層厚0.1m以上。上面が第3面。
- 28層：7.5Y2/1黒色極細～中粒砂混粘土質シルト。粘土質シルトのブロックを含む。層厚約0.15m。上面が第3面。
- 29層：10Y4/1灰色シルト質粘土。炭酸鉄を含む。層厚0.1m以上。
- 30層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト。炭酸鉄を含む。上面土壤化？。層厚0.15m以上。
- 31層：7.5Y6/1灰色中～極粗粒砂。層厚0.1m以上。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1面〉

8～11層上面(T.P.+6.2～6.6m)で畦畔状遺構1条(畦畔状遺構101)を検出した。西部に行くほど11層である河川堆積の砂が厚さを増して堆積しているため遺構面は西が高く、東部と比べて約0.4mの高低差がある。西部の第58次調査地の成果からみて、第1面の時期は古代～中世と考えられる。



第4図 第1面平面図・第3面平面図・遺構断面図・遺物出土状況図

## 畦畔状遺構（畦畔状遺構）

## 畦畔状遺構101

調査区東部のV-14-6 I 地区で検出した。南北に伸びる畦畔で、北部は調査区外に至る。規模は検出長6.1m・上幅1.0~2.0m・下幅が2.4~3.1m・高さ0.02mを測る。畦畔状遺構としたが非常に低い高まりであり、自然地形の可能性もある。

## 〈第2面〉

16層上面(T.P.+5.7~5.8m)で捉えた面である。明確な遺構等は検出されていないが、16層は非常に汚れた層相であり、周辺の調査地で確認されている古墳時代中期の水田面に相当するものと考えられる。

## 〈第3面〉

調査区西部の26~28・30層上面(T.P.+5.0~5.4m)で、水田1筆（水田301）とそれを区画する畦畔1条（畦畔301）を検出した。

水田（水田）・畦畔（畦畔）

水田301・畦畔301

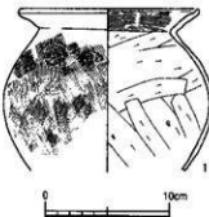
V-14-6・7 H I 地区で、矩形の平面形状をなす水田の北コーナー部分を検出した。水田301は畦畔301に囲まれ、主軸はN-25°-Eである。南部は調査区外に至るために、平面形・田積等は不明である。畦畔301の規模は、検出長で東辺が約9.0m・西辺が約7.0m・幅は上幅0.45~1.3m・下幅1.5~1.8mで、コーナー部分で下幅約2.5mを測る。細~極粗粒砂質粘土質シルト(25層)の盛土によって構築され、最大約0.2mの厚みがあり、上面は土壤化が認められる。外側構築面からの高さは約0.35~0.4m、水田301耕作面からは約0.3mの高さを持つ。

遺物は畦畔301北コーナー付近の盛土内部から庄内式壺が1点出土している(1)。出土状況は斜めに半裁した壺を正位に据えたような状況で、何らかの祭祀的要素を持つ可能性がある。1は口縁部がほぼ全周するものの、底体部の1/2が欠損している。口径14.5cm・復元体部最大径17.0cmを測る。体部外面のハケは肩部まで及び、肩部の平行タタキは8本/cmと細い。また口縁部内面にもハケを施している。外面全面が焼けている。胎土は牛駒西龍産である。古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定されるもので、水田構築の時期を示しているといえよう。

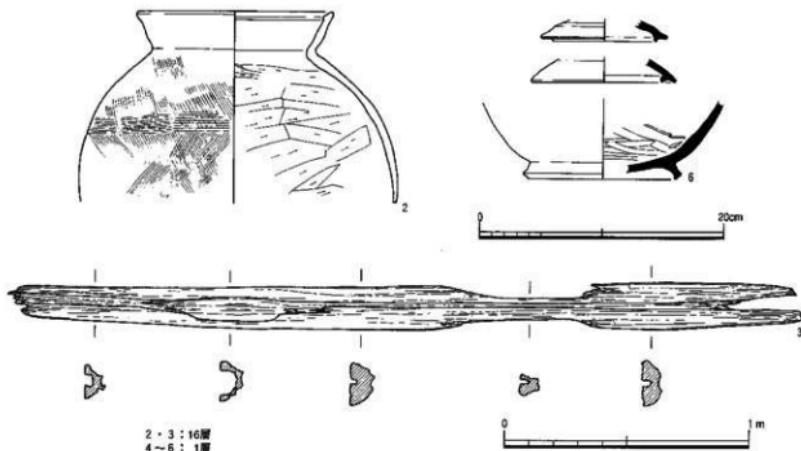
## 〈遺構に伴わない遺物〉

## 16層出土遺物

第2面のベースとなる16層からは、古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される壺1点(2)が出土している。上半部の1/2程度が残存しており、口径15.4cmを測る。全体に器壁が厚く、調整



第5図 畦畔301出土遺物



第6図 1・16層出土遺物

は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ヘラケズリで、外面全面が煤けている。口縁部の一箇所が内側に歪んでいる。調査区北西部V-14-6 H地区出土。3は長さ3.2m・幅13~19cm・厚さ8~10cmを測る長大な木製品である。半裁した丸太の平坦面側中央に、幅2~10cmの溝を施しており、木樋状を成す。また一箇所の両側に長さ約70cmの抉りを設けている。用途は不明である。V-14-7 G・H地区出土。樹種はヒノキ。

#### 15層出土遺物

V-14-6 H地区で16層上面に形成された窪みに流れ込んだ状態で板材(図版七)が出土した。長さ0.85m・幅0.25m・厚さ0.55mを測る平面長方形の板材である。加工痕があるが、現段階ではその用途は不明である。

#### 1層出土遺物

古代～中世の作土層と考えられる1層からは、飛鳥～奈良時代に比定される土師器・須恵器が出土しており、須恵器(4～6)を図化した。4・5は杯蓋の小片で、復元口径10.4・11.6cmを測る。飛鳥時代に比定される。6は壺類の底部で、復元高台径10.8cm・高台高1.3cmを測る。奈良時代に比定される。

## 第4章まとめ

今回の久宝寺遺跡第55次調査(KH2003-55)は道路建設に伴う調査である。周辺の調査事例をふまえて今回の調査成果を概観してみる。

第1面では畦畔状遺構とした遺構を検出した。遺構面の標高は西部が高くなっている、西側の第58次調査(KH2004-58)では奈良時代～中世の土坑・ピット・耕作溝等が密に検出されている。当地がこの居住域に伴う生産域となっていた可能性がある。

第2面では遺構は検出されなかったが、周辺で確認されている古墳時代中期～後期の水田面相当層を確認した。

第3面では古墳時代初頭後半(庄内式新相)に構築された水田遺構を検出した。東部の第25次調査(KH98-25)では同時期の畑状遺構や溝から成る生産域が検出されており、有機的な関連が窺える。

### 参考文献

- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器I 都城の土器集成』
- ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器II 都城の土器集成』



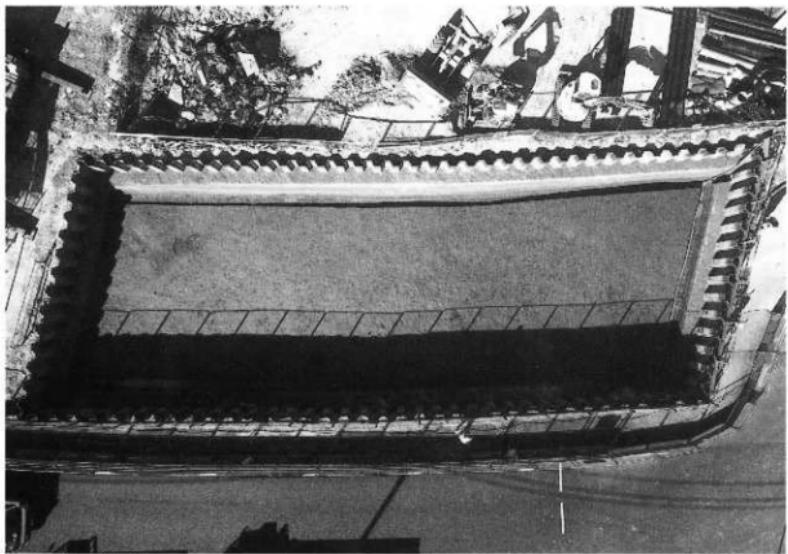
# 図版



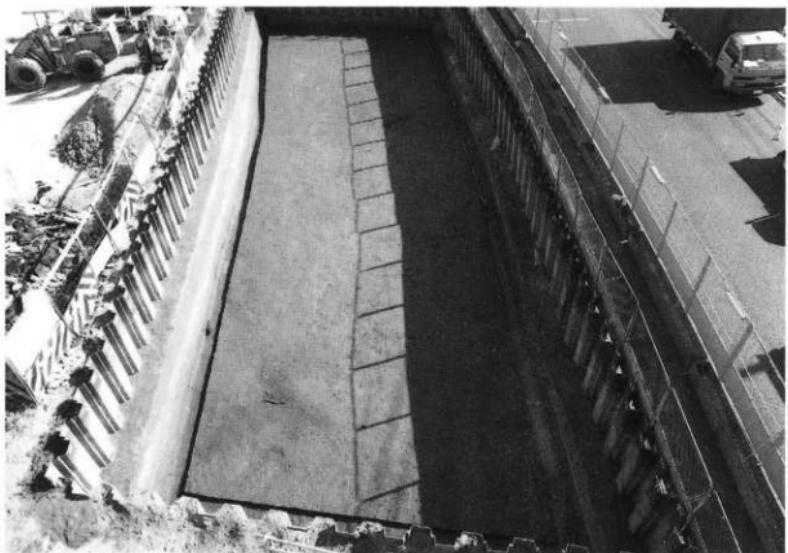
調査区より東方を望む



第1面（西から）



第2面（上が北西）



同上（西から）



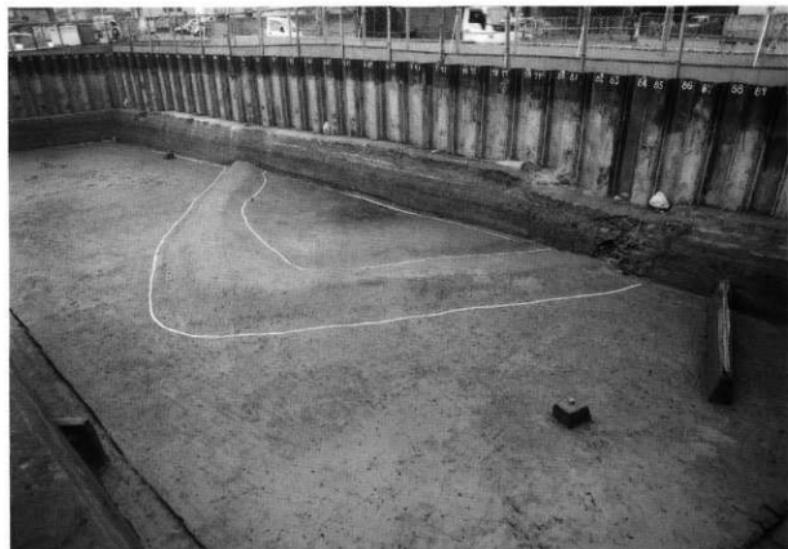
第3面（上が北西）



同上（西から）



水田301・畦畔301（北東から）



同上（北西から）



畦畔301東部南壁（北から）

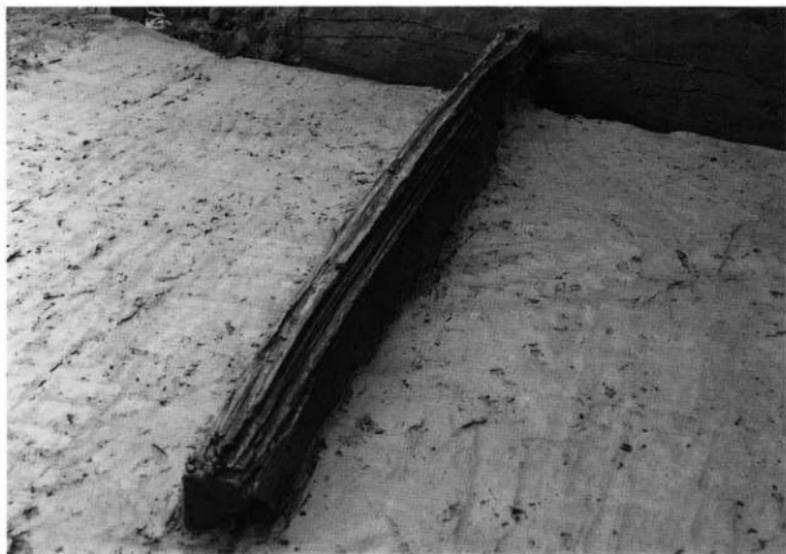


畦畔301内土器（1）出土状況（南から）

図版六



北壁15層内板材出土状況（南から）



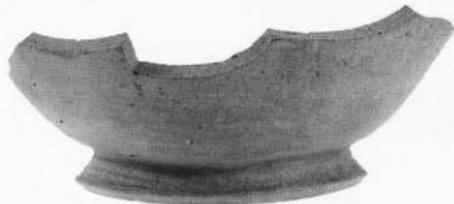
16層出土木製品（3）出土状況（北西から）



1



2



6



15層(板材)

畦畔301 (1)、16層 (2・3)、1層 (6)、15層出土遺物

V 久宝寺遺跡第58次調査（K H2004-58）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では北亀井町3丁目)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で、平成16年度に実施した竜華東西線1-1工区(北)掘削工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第58次調査(KH2004-58)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が独立行政法人都市再生機構西日本支社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年5月31日～9月30日にかけて坪田真一が担当した。調査面積は287m<sup>2</sup>である。現地調査においては、伊藤静江・加藤邦枝・川村一吉・北原清子・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・山内千恵子・吉川一栄・若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成17年11月～平成18年3月に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測・図面トレースー山内、図面レイアウトー坪田真一、遺物写真撮影ー坪内が行った。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力を受けた。  
独立行政法人都市再生機構西日本支社、(有)カンエイ建設工業、(株)島田組
1. 自然科学分析・測量については下記の機関に委託した。  
【木製品の樹種同定】パリノ・サーヴェイ(株)  
【航空写真測量】(株)かんこう
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、143頁に提示した。

## 本　文　目　次

第1章 調査に至る経過 .....	127
第2章 調査概要 .....	128
第1節 調査の方法と経過 .....	128
第2節 基本層序 .....	129
第3節 検出遺構と出土遺物 .....	130
第3章 まとめ .....	143

## 挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	127
第2図	調査区設定図	128
第3図	基本層序	129
第4図	第1面平面図	131-132
第5図	第1面土坑断面図	133
第6図	第1面遺構出土遺物①	134
第7図	第1面遺構出土遺物②	135
第8図	第1面小穴断面図	136
第9図	第2面遺構断面図	138
第10図	第2~4面平面図	139
第11図	S D201出土遺物	140
第12図	畦畔状遺構301・S D401断面図	140
第13図	畦畔状遺構301出土遺物	141
第14図	4・12・13層出土遺物	142

## 表 目 次

第1表	第1面溝(S D101~129)一覧表	137
第2表	第1面小穴(S P101~133)一覧表	137

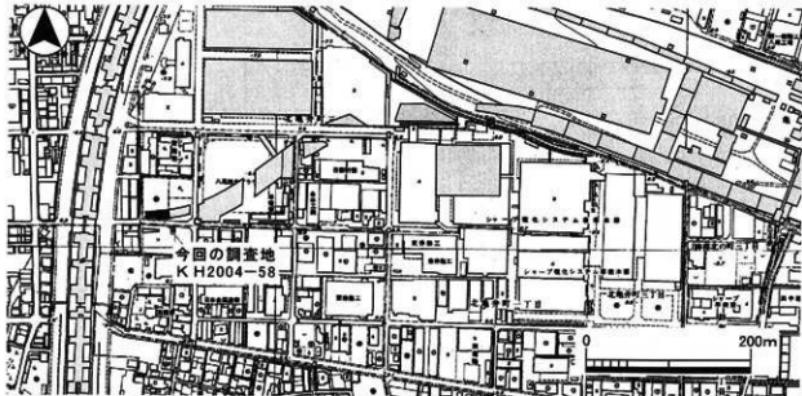
## 図 版 目 次

図版一	第1面	図版七	畦畔状遺構301南東部・南壁
図版二	第1面西部		同上北東部北壁
	第1面中央部	図版八	第4面
図版三	S K101 S K102		S D401
	S P101 S P101北部	図版九	S D401北壁
	S P105 S P118・119		14層内不明木製品(17)出土状況
図版四	第2面	図版一〇	S K104、S P101、S P118・119 間、S P132、溝群1、溝群2、 S D201出土遺物
	S P202		
図版五	第3面	図版一一	畦畔状遺構301、第1面、12層、 13層出土遺物
図版六	第3面		
	畦畔状遺構301		

## 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた三角州上の微高地に位置する縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡である。久宝寺遺跡における発掘調査は、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道建設に伴う調査を嚆矢とし、大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されている。これらの調査では縄文時代後期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが認識されている。

今回、久宝寺遺跡第58次調査を実施した久宝寺遺跡南西部においては、第1次調査(KH84-1)、第9次調査(KH91-9)、第37次調査(KH01-37)で古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)の居住域や墓域が検出されている。また平成9年度以降は旧国鉄竜華操車場跡地の再開発に伴う調査が実施されており、第22次調査(KH97-22)では、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構・遺物が検出されている。さらに調査地東側では平成10年度～12年度に第25次調査(KH98-25)、第36次調査(KH2000-36)を実施しており、古墳時代初頭(庄内式期)・古墳時代中期の畠状遺構・水田といった生産関連遺構が検出されている。このように遺跡範囲南西部では、沖積低地に特有の河川堆積物の累重により形成された不安定な微地形を積極的に活用した各時期の集落の拡がりが確認されている。なお地理・歴史的環境の詳細については「本書I－第2章」を参照されたい。本書で報告する久宝寺遺跡第58次調査(KH2004-58)は、竜華東西線1-1工区(北)建設に伴って実施した発掘調査である。平成15年度に実施した第55次調査(KH2003-55)が同事業の第1期工事にあたり、その西側に連続する部分の2期工事に伴う調査である。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、都市基盤整備公團閏西支社、(財)八尾市文化財調査研究会による業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。



### 第1図 調査地位置図( $S=1/6000$ )

## 第2章 調査概要

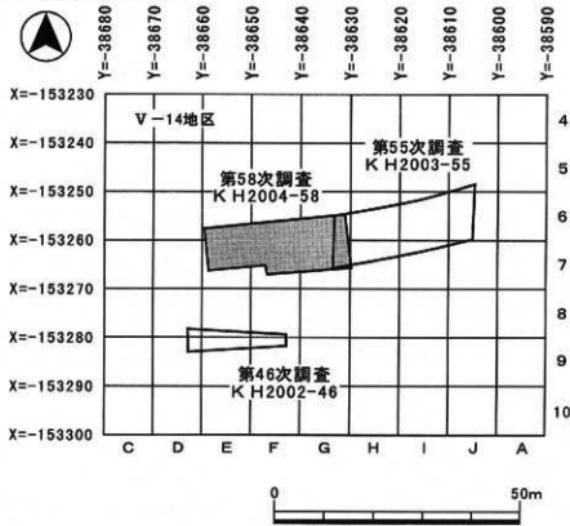
### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地とその周辺で計画された「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の竜華東西線1-1工区(北)建設に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第58次調査にあたる。

調査地点は竜華操車場跡地の西側に位置している。調査地平面形は東西29m、南北9~11m、調査面積は287m<sup>2</sup>を測る。

調査区全域の地区割については、竜華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第VI系〔日本測地系〕(原点-東経136°00'、北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I~VIII)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をVIIIと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1~25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区的呼称については、東西方向はアルファベット(西からA~J)、南北方向は算用数字(北から1~10)で示し、1A地区~10J地区とした。なお個々の地点表記においては国土座標値を入れる方法を取った。(本書14頁参照)

調査は鋼矢板打設により調査区を囲繞する方法をとり、調査区の北・西・東に土層観察用のセクション(幅0.5m)を設定している。



第2図 調査区設定図 (1/1000)

調査に際しては、遺跡範囲確認調査の結果から現地表下1.05m前後を機械掘削の対象範囲とし、以下約1.6mについては人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。

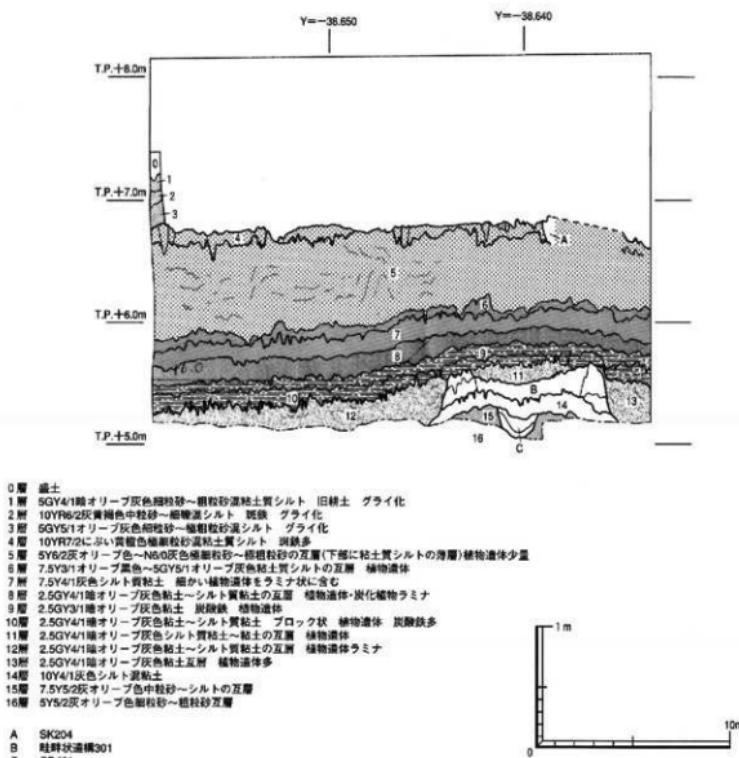
遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、2桁の番号と合わせて表記した。[凡例 S D 101]。

現地調査での平面図の作成については、2回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)を実施した。

調査の結果、弥生時代後期～中世に比定される遺構・遺物を検出した。

## 第2節 基本層序

0層は盛土、1層は旧耕土である。2・3層もグライ化・搅拌の著しい層相であり、中世～近世の耕作土と捉えられよう。4～10層は調査地全域に見られる。4層は搅拌され汚れた土壤化層



第3図 基本層序

で、南東部では粘土質シルト、北西部に行くほど砂粒の含有が顕著となる。下位の洪水砂層とは一連の層である。上面が第1面である。5層は洪水砂層で、層厚0.5~0.8mを測り、北西部が最も厚く堆積している。上面が第2面である。6~10層は東部第3面で検出した畦畔状遺構301の高まりに沿った堆積状況で、粘土を基調とする静水域における一連の水成層と捉えられる。8層は第55次調査の15層にあたり、当地一帯で認められる古墳時代中期の生活面を覆う鍵層となっている。10層はブロック状を呈する層相である。下面の起伏が著しいことから、踏み込みに起因する可能性がある。木製品(槽・不明木製品)が出土している。11層は畦畔状遺構301の上面、12・13層は両側に堆積する水成層で、一連の堆積と考えられる。14層は畦畔状遺構301下位の北部でのみ見られたが、盛土の可能性もある。15・16層は一連の水成層と考えられる。14層上面が第3面、15層上面が第4面である。

0層：盛土

1層：5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト。旧耕土。グライ化。層厚0.15m。

2層：10YR6/2灰黄褐色中粒砂～細礫混シルト。斑鉄。グライ化。層厚0.15m。

3層：5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト。グライ化。層厚0.20m。

4層：10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂混粘土質シルト。斑鉄多。攪拌され汚れた土壤化層。層厚0.15m。上面が第1面。

5層：5Y6/2灰オリーブ色～N6/0灰色極細粒砂～極粗粒砂の互層(下部に粘土質シルトの薄層)。植物遺体少量。層厚0.5~0.8m。上面が第2面。

6層：7.5Y3/1オリーブ黒色～5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト～シルトの互層。植物遺体。層厚0.1~0.2m。

7層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。細かい植物遺体をラミナ状に含む。層厚約0.2m。

8層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土の互層。植物遺体、炭化植物をラミナ状に極めて多量に含む。層厚約0.2m。

9層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。炭酸鉄含む。細かい植物遺体を多く含む。層厚約0.1m。

10層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土。ブロック状。植物遺体。炭酸鉄多く含む。層厚0.05~0.15m。

11層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土～粘土の互層。植物遺体。

12層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土の互層。植物遺体をラミナ状に多く含む。層厚最大0.4m。

13層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土互層。植物遺体多。

14層：10Y4/1灰色シルト混粘土。層厚約0.15m。上面が第3面。

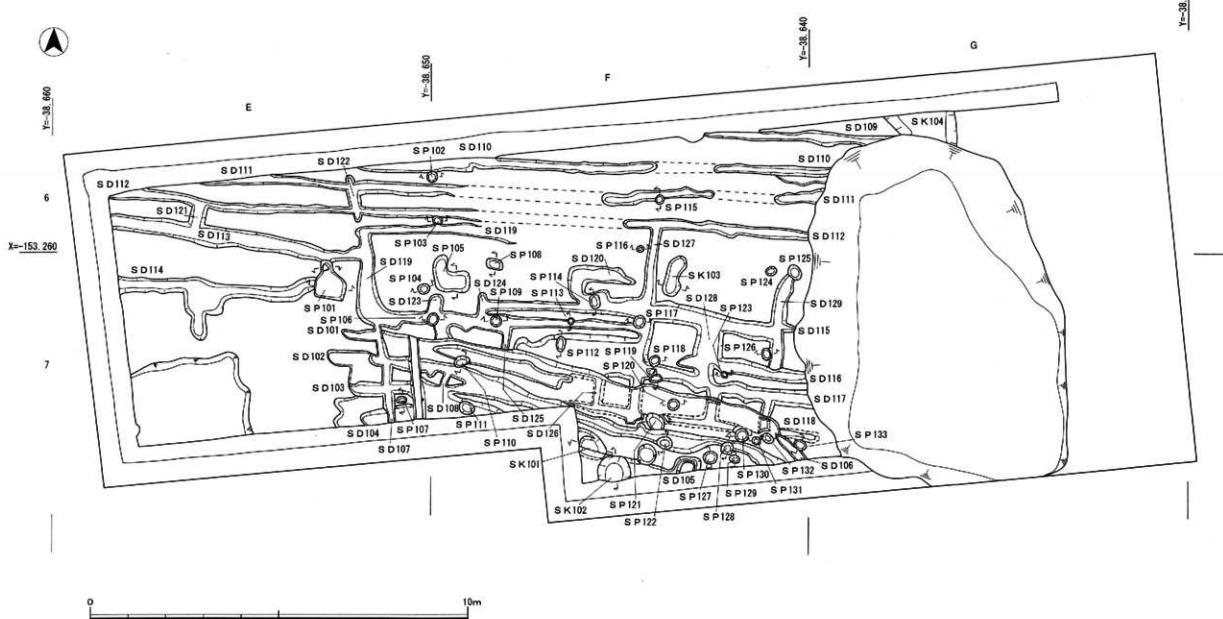
15層：7.5Y5/2灰オリーブ色中粒砂～シルトの互層。層厚約0.2m。上面が第3・4面。

16層：5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂互層。層厚0.2m以上。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1面〉

調査地全境の4層上面(T.P.+6.7~6.8m)で土坑4基(S K 101~104)、溝29条(溝群1:SD 101~108、溝群2:SD 109~129)、小穴33個(SP 101~133)を検出した。



第4図 第1面平面図

## 土坑(SK)

## SK101

V-14-7 F 地区で検出した。平面形は長軸0.8mの橢円形を呈し、深さ0.3mを測る。断面逆台形を成し、埋土は上から10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土、10YR5/1褐灰色シルト質粘土混細粒砂～中粒砂、10YR5/2灰黃褐色シルト質粘土混細粒砂の3層から成り、全体に鉄分が多く含んでいる。遺物は土師器片が少量出土したのみで、時期は古代～中世頃と思われる。

## SK102

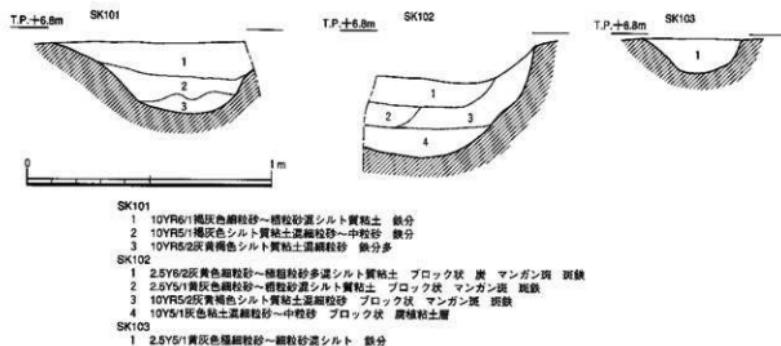
SK101の南東部に隣接して検出した。平面形は直径約0.7mの円形を呈し、深さ0.46mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上から2.5Y6/2灰黃色細粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土、2.5Y5/1灰黃色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土、10YR5/2灰黃褐色シルト質粘土混細粒砂～中粒砂、10Y5/1灰色粘土混細粒砂～中粒砂(腐植土)の4層から成る。全体にブロック状を呈し、マンガン斑・斑鉄を多く含んでいる。遺物は平安時代までの土師器・須恵器・黒色土器片が少量出土しているが、図化しえるものは無かった。他に焼壁片が出土している。

## SK103

V-14-7 F 地区で検出した南北に長い溝状を成す土坑である。規模は長辺1.1m・短辺0.45m・深さ0.14mを測る。断面逆台形に近く、埋土は溝群2の溝と同じであり、本遺構も溝の一部である可能性が高い。遺物は古代～中世頃と思われる土師器片が出土しているが、図化しえるものは無かった。

## SK104

V-14-6 G 地区で検出した。北は調査区外に至り、南は搅乱坑により削平されている。規模は東西幅約1.6m・深さ0.27mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が2.5Y5/1オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂少泥粘土質シルト(斑鉄)、下層が5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト(ブロック状)の2層から成る。遺物は奈良～平安時代に比定される土師器が出土しており、1・2を図化した。1は杯で、復元口径18.0cmを測る。平城宮杯A IIにあたり、口縁部内面に斜放射暗文を施す。精良な胎土で色調は淡黄褐色である。時期は平城宮土器III頃と考えられる。2は



第5図 第1面土坑断面図

製塙土器で、復元口径11.6cmを測る。手捏ねによる成形で、全体に指頭圧痕が顕著に認められる他、部分的に口縁端部が内側に折れ曲がる。胎土は密であるが、1~2mm大の砂粒(チャート・長石等)を極めて多量に含んでいる。時期は平安時代初頭頃に位置付けられよう。同種の製塙土器は他に2点出土している。

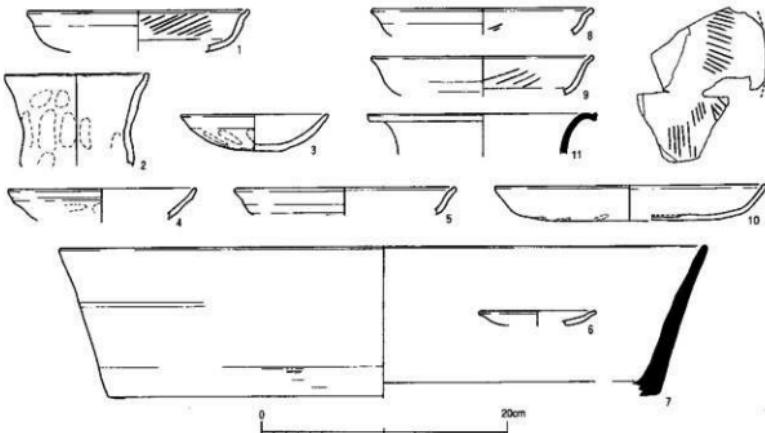
### 溝（SD）

#### 溝群1（SD 101~108）

調査地南部に位置しており、溝群2の溝を削平して一段落ち込んだ部分で検出した。東西方向に平行する6条（SD 101~106）、これに直交する2条（SD 107・108）で構成される溝群である。法量は幅0.2~0.4m・深さ0.1m程度を測る。断面逆台形を成し、埋土は10YR4/1褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト(ブロック状・斑鉄多)である。耕作に伴う溝であろう。遺物は奈良～平安時代に比定される土師器・須恵器・黒色土器が出土しており、6・7を図化した。6は土師器皿の小片で、復元口径9.6cmを測る。退化した「て」の字状口縁を成し、精良な胎土で色調は淡黄橙色である。時期は11世紀末～12世紀初頭に比定される。7は須恵器盤で、復元口径52.8cm・底径45.0cmを測るが小片そのため法量は不明確である。口縁部～体部間に1条の凹線を巡らせる。焼成はやや不良である。各溝の法量等は第1表にまとめた。

#### 溝群2（SD 109~129）

東西方向に平行する10条（SD 109~118）、これに直交する8条（SD 121~129）、屈曲する2条（SD 119・120）で構成される溝群である。法量は幅0.2~0.5m・深さ0.1m程度を測り、断面逆台形で、埋土は10Y6/1灰色中粒砂～極粗粒砂混シルト(斑鉄多)である。耕作に伴う溝であろう。遺物は奈良～平安時代に比定される土師器・須恵器が出土しており、8~11を図化した。8・9



第6図 第1面遺構出土遺物①

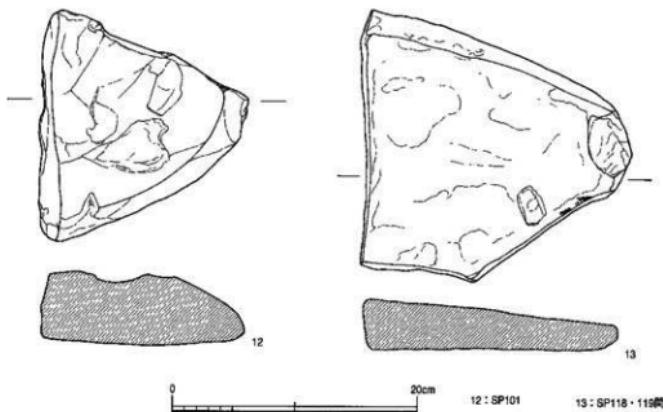
は土師器杯の小片である。共に復元口径18.0cmを測り平城宮杯A IIにあたるもので、口縁部内面に斜放射暗文を施す。8は精良な胎土で色調は橙色である。口縁部下位に黒斑が認められる。9は0.5mmまでの砂粒を多く含む胎土で褐色を呈する。10は土師器皿である。復元口径22.0cmを測り、平城宮皿Aにあたる。暗文は底部内面外周の斜放射暗文が確認できる。0.5mmまでの砂粒をわずかに含む胎土で淡褐色を呈する。11は須恵器広口壺で、復元口径18.6cmを測る。口縁部内面上位に灰が被る。胎土密、焼成良好で、断面赤紫色を呈する。これらの土器の時期は奈良時代中葉～平安時代初頭頃と考えられる。各溝の法量等は第1表にまとめた。

#### 小穴 (S P)

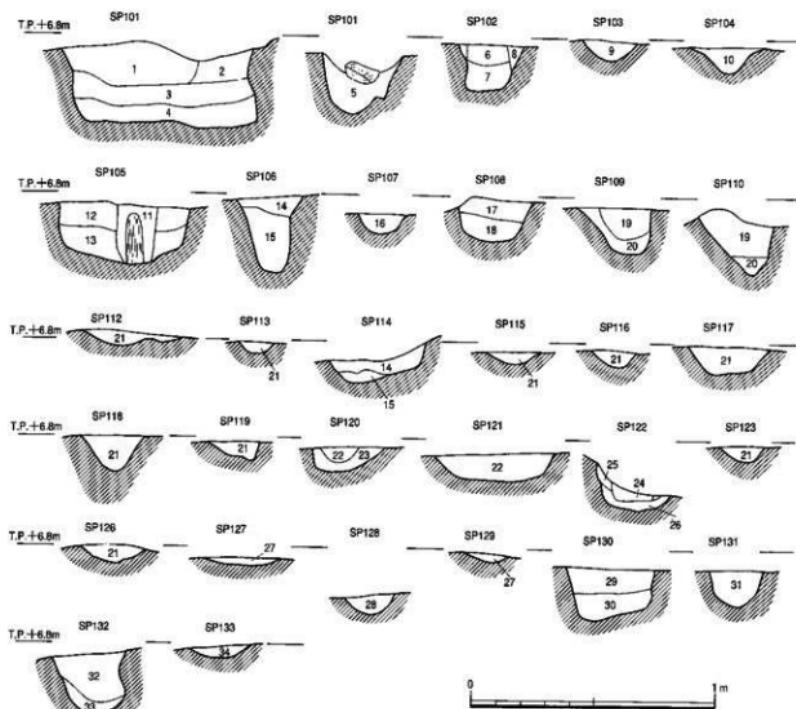
S P 101～133

調査地の中部で多く検出された。溝群1・2の溝との切り合い関係のある小穴は、いずれも溝を切っている。平面円形・椭円形で直径30cm程度のものが多くを占める。S P 101は規模が大きく、平面不整形を呈するが、本来は方形の掘方であったと考えられる。北辺の拡張部分は柱を抜き取る際に生じたと捉えられよう。この部分からは平坦面を有する石材(12)が出土しているが、同時に取り除かれた根石である可能性が高い。またS P 118・119間からも同様の石材(13)が出土しており根石であったと考えられる。12は平面形が一辺約19cmの正三角形を呈し、厚さ最大5.8cmを測る。13も一辺約25cmの三角形の一部を欠いたような形状で、厚さ2.2～4.2cmを測る。共にローリングされた川原石で加工は施していない。S P 105も平面不整形で規模が大きい。東半の一辺0.55mを測る方形部分が本来の掘方と考えられ、その中央の底部には直径約7cm・長さ約22cmを測る柱根が遺存していた。なお、これら的小穴からは建物を構成するような規格性は見出せなかった。各小穴の法量・出土遺物等は第2表にまとめた。

各小穴からは土師器・須恵器・黑色土器等が出土しており、3～5を図化した。3・4は土師碗である。3は約1/2が残存し、復元口径12.0cm・器高3.1cmを測る。4は小片で、復元口径



第7図 第1面遺構出土遺物②



- 1 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂粒～粗粒砂混シルト質粘土  
ブロック状 厚少 鉄分
- 2 3.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土質シルト ブロック状 鉄分
- 3 5Y6/1灰黄色細粒砂～中粒砂多混シルト質粘土  
ブロック状 厚 灰鐵
- 4 2.5GY6/1オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土  
ブロック状 薄 鋼鐵
- 5 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土質シルト 鉄分
- 6 2.5Y4/1黄灰色細粒砂粒～粗粒砂多混シルト
- 7 2.5Y4/1黄灰色細粒砂多混シルト
- 8 2.5Y5/2灰黑色細粒砂混粘土質シルト 鉄分
- 9 2.5Y5/2灰黑色細粒砂混粘土質シルト 質粘土
- 10 2.5Y5/1黄灰色細粒砂混シルト
- 11 2.5Y6/1黄灰色細粒砂粒シルト
- 12 10YR5/1褐灰色細粒砂粒～粗粒砂多混シルト 鉄分
- 13 2.5Y6/1黄灰色シルトブロック状混粗粒砂粒 鉄分
- 14 2.5Y5/1黄灰色細粒砂混シルト ブロック状 厚 灰土 鉄分
- 15 10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 16 10YR5/2灰黃褐色細粒砂混シルト質粘土  
17 2.5Y6/1黄灰色細粒砂粒～粗粒砂混シルト ブロック状 鉄分
- 18 2.5Y5/1黄灰色シルトブロック状混粗粒砂粒
- 19 10YR5/2灰黃褐色細粒砂混シルト 鉄分
- 20 2.5Y5/288灰黃褐色細粒砂粒～粗粒砂混シルト 鉄分
- 21 2.5Y5/1灰黑色細粒砂粒～粗粒砂混シルト 鉄分
- 22 2.5GY6/1灰黑色細粒砂混粘土質シルト 鉄分
- 23 2.5Y5/1灰黑色細粒砂混粘土質シルト 鉄分
- 24 10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト 質
- 25 2.5Y5/2灰黑色細粒砂粒～粗粒砂混シルト 鉄分
- 26 2.5Y5/2褐灰色シルト ブロック状混粗粒砂粒～粗粒砂
- 27 5Y5/1灰黑色細粒砂粒～粗粒砂混シルト
- 28 10YR5/1褐灰色中粒砂混粘土質シルト 厚 灰鐵
- 29 2.5Y5/1灰黑色細粒砂粒～粗粒砂混粘土質シルト
- 30 2.5Y5/1灰黑色細粒砂粒～粗粒砂混粘土質シルト
- 31 2.5Y6/2灰黃褐色細粒砂混粘土質シルト 鉄分多
- 32 2.5Y4/1黄灰色細粒砂粒～粗粒砂混粘土質シルト 鉄分
- 33 10YR5/2灰黃褐色細粒砂粒 質
- 34 10YR4/1褐灰色細粒砂粒～中粒砂混シルト 厚 灰土

第8図 第1面小穴断面図

15.2cmを測る。4は口縁部にヨコナデによる段が生じる。3は2.0mmまで、4は0.5mmまでの砂粒を含む胎土で、色調は共に褐色系である。平安時代前期に比定される。5は土師器杯の小片で、復元口径18.0cmを測る平城宮杯A IIにあたる。胎土密で色調は明褐色。暗文は認められず、奈良時代後期に比定されよう。

第1表 第1面溝(S D 101~129)一覧表

遺構名	地区	方向	検出長(m)	幅(最大)	深さ(m)	備考
S D 101	V-14-7 E·F	北西-南東	6.25	0.32~0.46	0.05	
S D 102	タ	タ	12.5	0.25~0.54	0.13	
S D 103	タ	タ	3.05	0.23~0.40	0.06	S D 102に合流
S D 104	V-14-7 E	タ	3.8	0.43以上	0.08	
S D 105	V-14-7 F		1.0	0.15~0.20	0.07	コの字状
S D 106	タ	北西-南東	1.0	0.27	0.06	
S D 107	V-14-7 E	南北	2.6	0.19~0.27	0.08	S D 101~104と直交 S D 119に合流
S D 108	V-14-7 F	北東-南西	0.35	0.20	0.10	S D 102~103を繋ぐ
S D 109	V-14-6 F·G	東西	5.15	0.21~0.39	0.07	
S D 110	V-14-6 E~G	タ	12.55	0.21~0.30	0.07	
S D 111	タ	タ	16.55	0.18~0.36	0.05	
S D 112	タ	タ	18.45	0.16~0.32	0.07	
S D 113	V-14-6·7 E	タ	6.7	0.24~0.57	0.06	S D 119に合流
S D 114	V-14-7 E	タ	5.2	0.32~0.83	0.12	
S D 115	V-14-7 F	タ	8.15	0.21~0.58	0.07	S D 124に合流
S D 116	タ	タ	3.5	0.30~0.42	0.08	
S D 117	V-14-7 F·G	タ	8.1	0.39	0.12	
S D 118	タ	タ	6.9	0.28	0.09	
S D 119	V-14-6·7 E·F		13.2	0.19~0.71	0.05	コの字状 S D 127に合流
S D 120	V-14-7 F		2.1	0.31~0.43	0.09	コの字状 S D 115に合流
S D 121	V-14-6 E	南北	1.45	0.42	0.08	S D 112~113を繋ぐ
S D 122	タ	タ	1.3	0.33	0.06	S D 111~112と直交
S D 123	V-14-7 F	タ	1.15	0.37	0.03	S D 119と直交
S D 124	タ	タ	0.95	0.28	0.04	S D 119に合流
S D 125	タ	タ	1.55	0.19	0.04	S D 119に合流
S D 126	V-14-6 F	タ	0.6	0.29	0.08	S D 117~118に合流
S D 127	V-14-6·7 F	タ	5.15	0.25~0.35	0.09	S D 115~117~118と直交 S D 112に合流
S D 128	タ	タ	2.25	0.38~0.78	0.13	S D 116~117と直交 S D 115~118に合流
S D 129	タ	タ	4.25	0.28~0.44	0.08	S D 115~118と直交

第2表 第1面小穴(S P 101~133)一覧表

遺構名	地区	平面形	規模(m)	深さ(m)	出土遺物
S P 101	V-14-7 E	方形	0.85×1.00	0.36	土師器・石材
S P 102	V-14-6 E·F	円形	0.24×0.25	0.19	土師器・須恵器
S P 103	V-14-6 F	タ	0.21×0.25	0.09	
S P 104	V-14-7 F	楕円形	0.27×0.32	0.11	
S P 105	V-14-6·7 E·F	不整形	0.95×0.98	0.26	土師器・須恵器・柱根
S P 106	V-14-7 E·F	楕円形	0.29×0.33	0.31	土師器・黒色土器
S P 107	V-14-7 E	タ	0.17×0.27	0.08	土師器
S P 108	V-14-7 F	隅丸長方形	0.27×0.45	0.19	土師器
S P 109	タ	円形	0.28×0.30	0.19	土師器
S P 110	タ	楕円形	0.29×0.43	0.28	土師器
S P 111	タ	タ	0.32×0.42	0.11	
S P 112	タ	楕円形	0.24×0.39	0.06	
S P 113	タ	円形	0.15×0.16	0.05	
S P 114	タ	楕円形	0.27×0.37	0.18	土師器・焼壁片
S P 115	V-14-6 F	円形	0.22×0.24	0.05	
S P 116	タ	楕円形	0.15×0.19	0.08	土師器・須恵器

遺構名	地区	平面形	規模 (m)	深さ (m)	出土遺物
S P 117	V-14-7 F	円形	0.33×0.33	0.12	土師器
S P 118	タ	楕円形	0.27×0.29	0.15	土師器
S P 119	タ	タ	0.22×0.35	0.08	土師器
S P 120	タ	円形	0.29×0.32	0.10	
S P 121	タ	楕円形	0.39×0.53	0.12	土師器
S P 122	タ	不整形	0.31×0.41	0.20	土師器・黒色土器
S P 123	タ	楕円形	0.16×0.20	0.07	
S P 124	タ	タ	0.23×0.27	0.14	
S P 125	タ	タ	0.34×0.41	0.10	
S P 126	タ	タ	0.25×0.32	0.07	
S P 127	タ	円形	0.33×0.36	0.03	
S P 128	タ	不整形	0.31×0.32	0.09	
S P 129	タ	楕円形	0.18×0.27	0.05	
S P 130	タ	円形	0.33×0.35	0.22	土師器
S P 131	タ	タ	0.20×0.23	0.15	土師器
S P 132	タ	楕円形	0.23×0.31	0.27	土師器・黒色土器
S P 133	タ	タ	0.24×0.34	0.06	土師器・須恵器

## 〈第2面〉

5層上面(T.P.+6.6m)で土坑1基(S K 201)、溝2条(S D 201・202)、小穴2個(S P 201・202)を検出した。

### 土坑(S K)

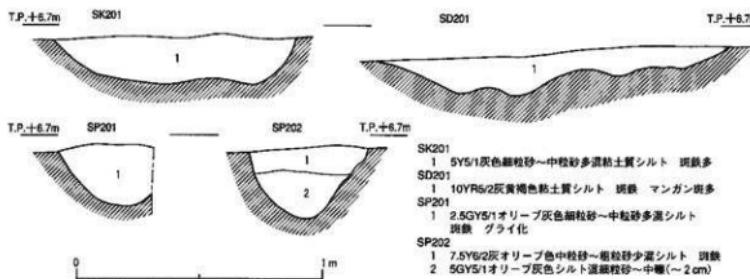
#### S K 201

V-14-7 F地区で検出した。平面形は約1.4×1.1mの東西に長い隅丸長方形を呈する。断面逆台形で、深さ0.2mを測り、埋土は5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂多混シルト(斑鉄多)である。遺物は出土していない。

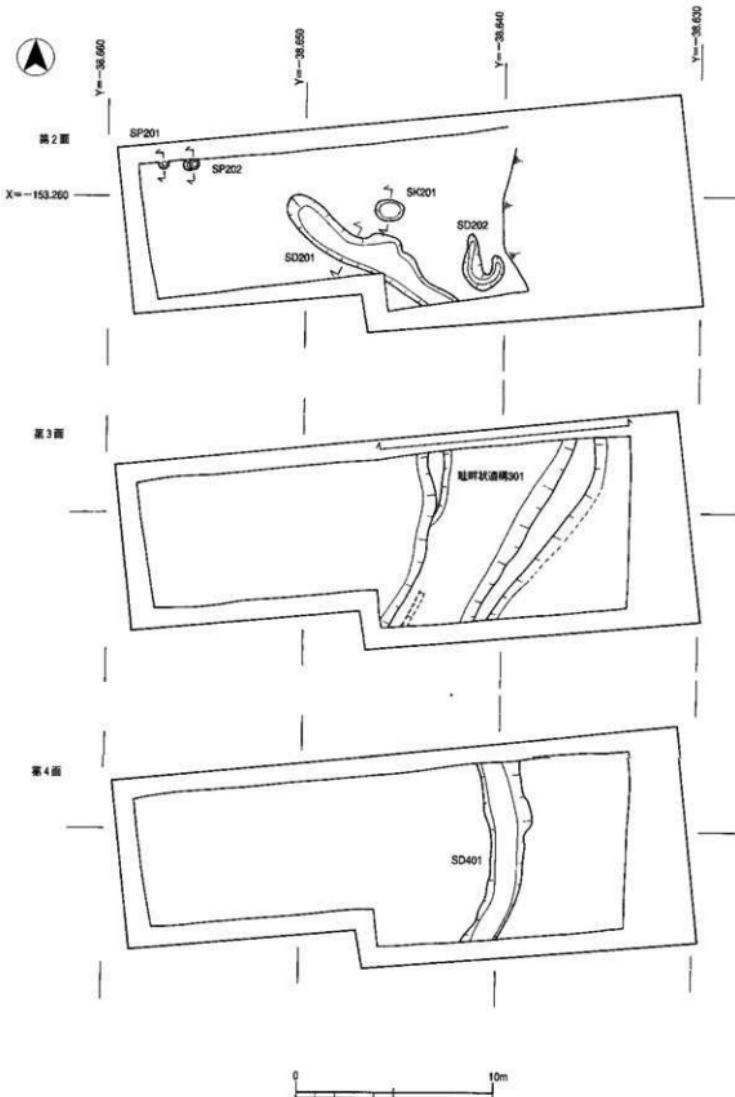
### 小穴(S P)

#### S P 201

V-14-6 E地区で検出した。平面形は直径約0.5mの円形を呈する。断面逆台形で、深さ0.25mを測り、埋土は2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂多混シルト(斑鉄・グライ化)である。遺物は出土していない。



第9図 第2面構造断面図



第10図 第2~4面平面図

### S P 202

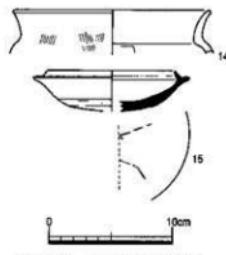
S P 201の東側で検出した。平面形は $0.6 \times 0.7\text{m}$ の東西にやや長い楕円形を呈する。断面逆台形に近く、深さ $0.3\text{m}$ を測る。埋土は上下2層から成り、上層は7.5Y6/2灰オリーブ色中粒砂～粗粒砂少泥シルト(斑鉄)である。下層は5GY5/1オリーブ灰色で、シルト混細粒砂～中疊( $\sim 2\text{cm}$ )という特異な埋土である。遺物は時期不明の土師器片が1点出土したのみである。

### 溝 (S D)

#### S D 201

V-14-6・7E・F地区で検出した北西～南東方向の溝で、南東部は調査区外に至る。規模は検出長 $10.0\text{m}$ ・幅 $1.2\sim 2.2\text{m}$ ・深さ約 $0.2\text{m}$ を測る。断面皿状を呈し、底部は起伏が著しい。埋土は10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト(斑鉄・マンガン斑多)で、基本層序の4層に準ずる層相である。4層は5層の洪水砂層から一連の水成層で、最終的に堆積した部分と捉えられることから、当溝の方向が洪水の方向を示していると考えられる。

遺物は飛鳥時代頃に比定される土師器・須恵器が少量出土しており、14・15を図化した。14は土師器壺の小片で、復元口径 $16.0\text{cm}$ を測る。外面はハケ調整で、胎土中に $2\text{mm}$ 以下の砂粒を少量含む。15は須恵器杯身で、復元口径 $10.4\text{cm}$ ・受部径 $12.7\text{cm}$ ・器高 $3.4\text{cm}$ を測る。底部外面ヘラ切り未調整でヘラ記号を有し、内面はナデを加える。飛鳥時代初頭に位置付けられる。



第11図 S D 201出土遺物

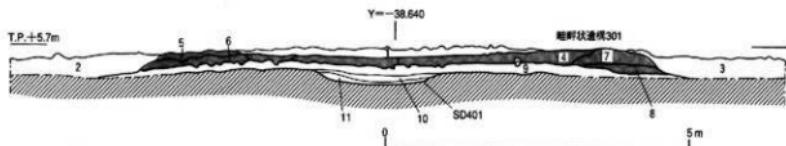
### (第3面)

調査区東半で14・15層上面(T.P.+5.2~5.4m)に盛土された畦畔状遺構1条(畦畔状遺構301)を検出した。

#### 畦畔状遺構(畦畔状遺構)

##### 畦畔状遺構301

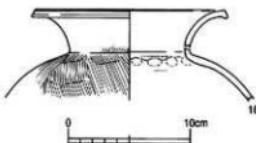
V-14-6・7F・G地区で検出した。北東～南西方向に伸びるもので、主軸はN-22°-Eである。規模は上幅 $3.0\sim 5.7\text{m}$ 、下幅 $4.5\sim 7.5\text{m}$ を測り、北に行くほど幅が増す。上面のレベルはT.P.+5.35~5.7mを測り北が高い。盛土は最大 $0.4\text{m}$ の厚さが確認でき、層相は概ね7.5Y3/1オリーブ黒色板細粒砂～細粒砂混粘土(ブロック状)で、南部ほど砂粒の含有が多い。上部は土壤化が著しく一見黒褐色を呈する。上面の両側が $10\text{cm}$ 程度堤状に盛り上がるが、構築に際してこの堤部分を盛土した後、中央部分に土を充填するような工法が採られているものと考えられる。当初は両端の高まりを畦畔、その間を水田として捉えていたが、この場合畦畔構築面より水田面が約 $20\text{cm}$ 上位になることから全体を畦畔状遺構とした。畦畔状遺構の西側・東側については、基本層序12・13層により埋まっており、調査深度がその下面まで達していないため明確ではない。ただ東側南部ではT.P.+5.2~5.3mに、7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂混粘土(搅拌され下層の砂が混ざる)が見られ、これが作土である可能性がある。遺物は東の堤部分南部の盛土内から古



- 1 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土～粘土の互層 植物遺体  
 2 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土の互層 植物遺体ラミナ  
 3 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土互層 植物遺体ラミナ  
 4 7.5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～細粒砂混粘土 8層のブロック性含む ブロック状 植物遺体  
 5 5GY3/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土 ブロック状 腐化植物少  
 6 5GY2/1オリーブ黑色極細粒砂少混粘土 8層のブロック性含む G ブロック状  
 7 5GY2/1オリーブ灰色粘土 腐化植物少  
 8 7.5GY4/1暗緑灰色粘土 8層のブロック性含む  
 9 10Y4/1灰色シルト道地土  
 10 7.5GY4/1暗緑灰色粘土～シルト質粘土互層 腐化植物ラミナ多  
 11 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～粘土の複雑な層(複伴層) ] SD401

第12図 畦畔状遺構301・S D 401断面図

墳時代初頭(庄内式期)に比定される土器片が少量出土しており、16を図化した。16は広口壺で、同一個体と考えられる口縁部・体部を図上で復元したものである。復元口径16.0cmを測る。外面調整はハケで、体部外面下位がやや焼けている。胎土中に5.0mmまでの砂粒を多量に含んでいる。



第13図 畦畔状遺構301出土遺物

#### 〈第4面〉

15層上面(T.P. + 5.2m)で溝1条(S D 401)を検出した。

#### 溝 (S D)

#### S D 401

V-14-6・7 F・G地区で検出した南北方向に伸びる溝で、東側に膨らむ弧状を成す。幅1.3~2.2m、深さ0.1~0.25mを測り、底のレベルは北がやや低い。断面皿状を呈し、埋土は2層から成り、上層が7.5GY4/1暗緑灰色粘土～シルト質粘土互層(炭化植物をラミナ状に多く含む)、下層が2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～粘土の複雑な層で、上層は自然堆積層、下層は攪拌されたような埋土である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

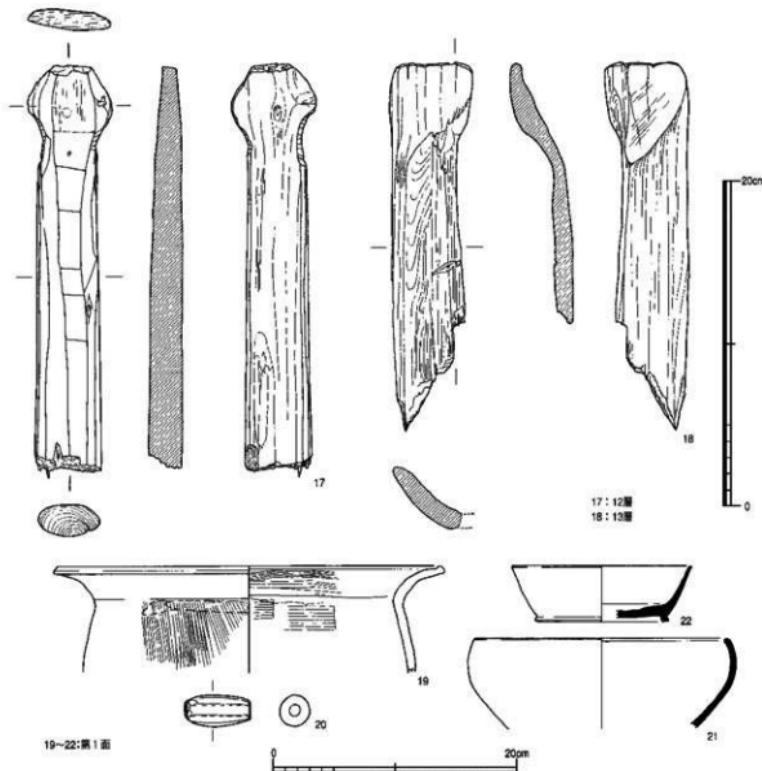
#### 〈遺構に伴わない出土遺物〉

#### 12・13層出土遺物

第3面を覆う水成層である12・13層からは木製品が出土した。畦畔状遺構301の西側(12層)からの不明木製品(17)、東側(13層)からの槽(18)がある。17は断面扁平な棒状を成す木製品で、丁寧に削られた表面を平滑に仕上げた精製品である。両端が欠損しているが、一方はほぼ端部まで遺存しているようである。この端部付近の両側に抉りを施し、幅広の頭部を形成している。法量は残存長25.6cm・幅3.6~5.1cm・厚さ0.8~2.1cmを測り、頭部に向かって厚さを減じている。樹種はイヌガヤ。18は槽の角部の小片で、残存部の法量は長さ22.8cm・幅5.1cm・高さ3.8cmを測る。短辺側の底部外面を面取りしている。樹種はヒノキ。

### 第1面出土遺物

19は土師器壺の小片で、復元口径32.0cmを測る。調整はハケを多用する。時期は奈良時代に比定されよう。20は土師器土鍤である。ほぼ完形で、法量は長さ5.4cm・幅約2.5cm・孔径0.9cmを測る。最大径が中央からややすれている。須恵器鉢(21)はいわゆる鉄鉢にあたるもので、復元口径20.8cmを測る。体部外面にヘラミガキを施す。1mm程度の砂粒を多く含む胎土である。19~21は第1面検出中に出土したもので、層位的には3・4層にあたる。22は須恵器杯身で、約1/2が残存している。復元口径14.7cm・器高4.6cm・高台径11.0cm・高台高0.5cmを測る。胎土中には1.0mmまでの砂粒を多量に含んでいる。調査区西壁掘削中に4層から出土した。21・22は奈良時代に比定される。



第14図 4・12・13層出土遺物

## 第3章 まとめ

今回の調査では古墳時代初頭～中世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ6箱を数える。

第4面では溝1条(SD401)を検出した。時期は明確ではないが、層位的にみて弥生時代に遡る可能性がある。

第3面では古墳時代初頭(庄内式期)に比定される畦畔状遺構(畦畔状遺構301)を検出した。東の第55次調査第3面にあたり、ここでは畦畔・水田が検出されている。しかし当調査区では明確な水田作土層が確認できなかった。さらに畦畔状遺構301はその形状・規模等が、第55次調査の畦畔とは異なることから、性格にやや疑問を残している。生産域を区画する大畦畔、あるいは道路状遺構の可能性もあり、周辺の調査の結果を待って生産域の様相を解明する必要がある。

周辺の調査地で確認されている古墳時代中期の水田域については、第55次調査と同様に相当層は見られたものの、遺構の検出はなかった。

第1面では奈良～平安時代の耕作溝、中世の土坑・柱穴等を検出した。南側の第46次調査では奈良～平安時代の井戸・溝等が検出されている他、西側の亀井北遺跡調査地でも当該期の遺構が検出されている。今回、中世の土坑・柱穴が耕作溝を切る状況が認められ、この時期に当地が生産域から居住域へと変化したことが看取される。

### 註記

註1 奥 和之・山上 弘 1986『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

### 参考文献

- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器I 都城の土器集成』
- ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器II 都城の土器集成』
- ・近江俊秀・岡田清一 1989「河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題ー木の本遺跡SW-02出土遺物を中心として」『八尾市文化財紀要4』八尾市教育委員会文化財室
- ・佐藤 隆 1992「第2節 平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告V』(財)大阪市文化財協会



# 図版



第1面（上が東）

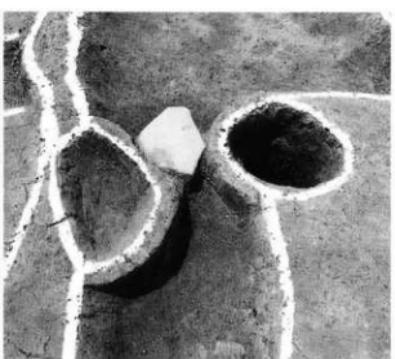




第1面西部（北から）



第1面中央部（北から）



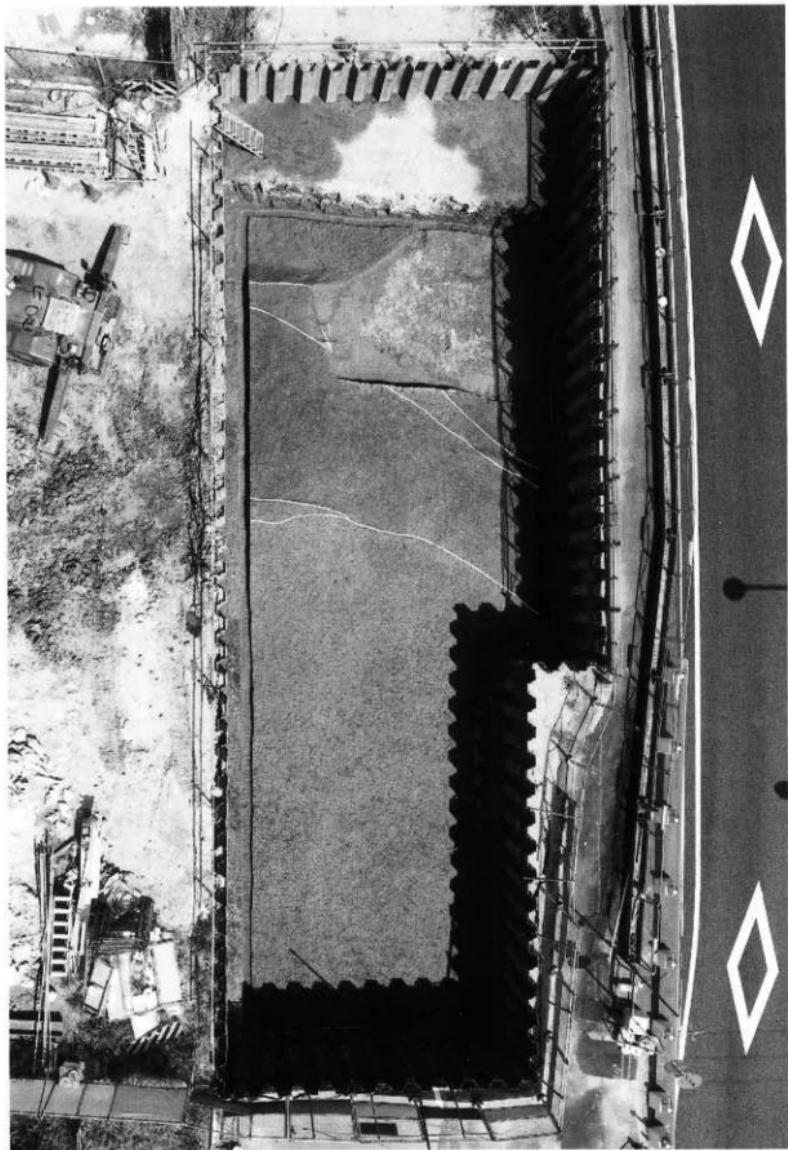
図版四



第2面（東から）



S P 202（東から）



第3面（上が東）



第3面（東から）



畦畔状造構301（北から）



畦畔状造構301南東部・南壁（北東から）

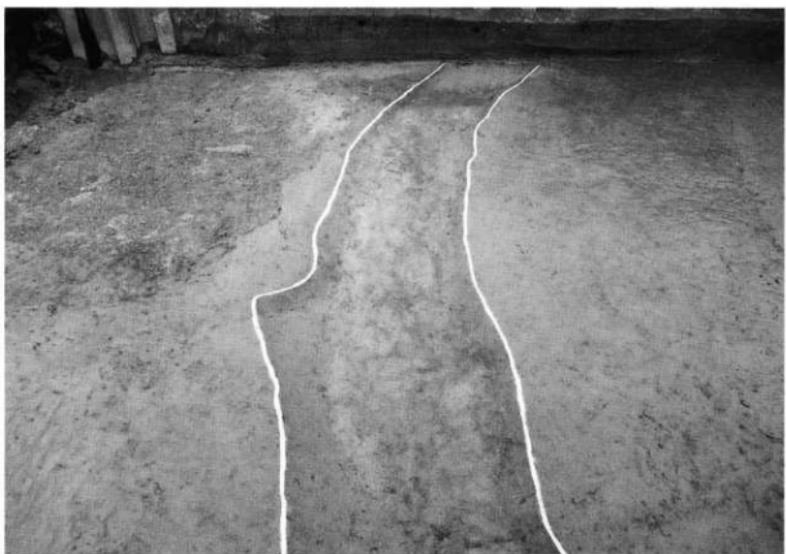


同上北東部北壁（南から）

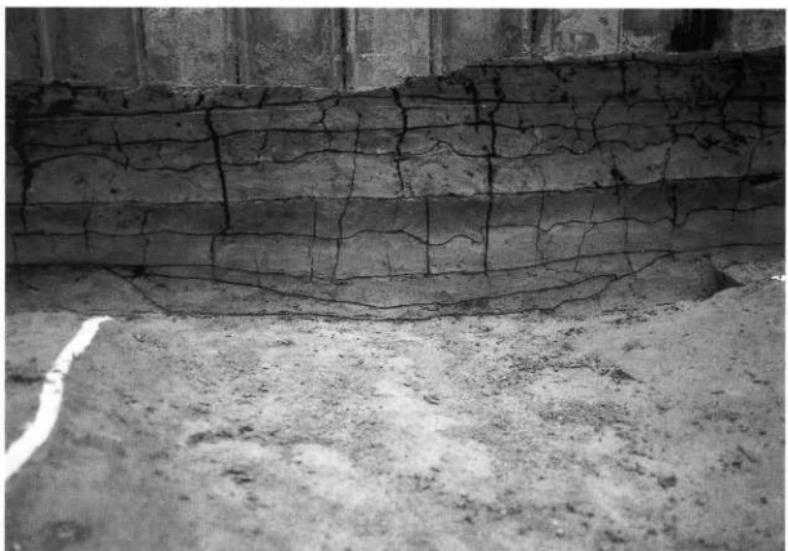
図版八



第4面（東から）



S D 401（北から）



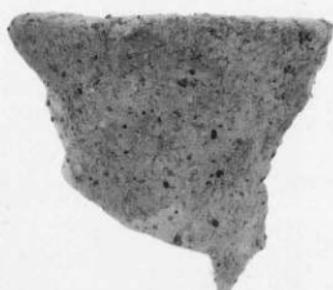
S D 401北壁



14層内不明木製品(17)出土状況(北西から)



1



2



7



11



3



15



12



13

S K104 (1・2)、S P101 (12)、S P118・119間 (13)、S P132 (3)、溝群1 (7)、溝群2 (11)、  
S D201 (15) 出土遺物



16



20



21



19



22



17



18

畦畔状遺構301 (16)、第1面 (19~22)、12層 (17)、13層 (18) 出土遺物

VI 久宝寺遺跡第60次調査（K H2004-60）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北龜井町3丁目で実施した大阪竜華都市拠点地区区画道路3号線外工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第60次調査(KH2004-60-1~3)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書(八教生文第137号 平成16年7月29日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が独立行政法人都市再生機構西日本支社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年10月7日から平成16年10月21日(実働5日)にかけて坪田真一・荒川和哉が担当した。調査面積は51.1m<sup>2</sup>である。現地調査においては、加藤邦枝・田島宣子・永井律子・中村百合・山内千恵子・吉川一栄が参加した。
1. 内業整理においては、上記現地調査参加者の他に畠内洋平の協力を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成16年10月29日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレースー荒川が行った。
1. 本書の執筆・構成は、荒川が行った。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からの協力を受けた。  
独立行政法人都市再生機構西日本支社、(株)鳥田組

## 本　文　目　次

第1章 調査に至る経過 .....	145
第2章 調査概要 .....	146
第1節 調査の方法と経過 .....	146
第2節 層序 .....	147
第3節 検出遺構と出土遺物 .....	148
第3章 まとめ .....	151

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図 .....	145
第2図 調査区設定図および地区割図 .....	146
第3図 検出遺構平面図および断面図 .....	149-150

## 表目次

第1表 溝群1(S D201~S D203)法量表 .....	148
---------------------------------	-----

## 図版目次

図版一 調査地全景	
1 調査区全景	
2 調査区全景	
図版二 2調査区 北壁(S D201・202)断面	
3 調査区全景	
3 調査区 S D101検出状況	

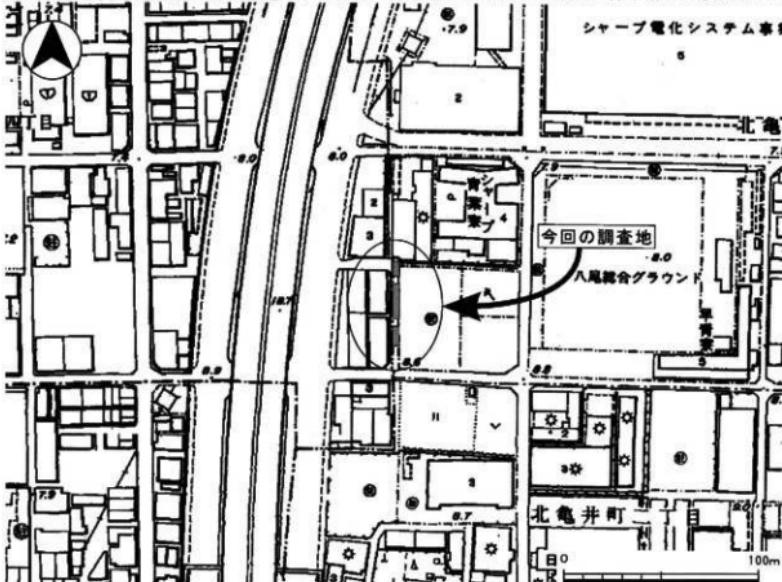
# 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、八尾市北西部に位置する。現在の行政区画では、北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・龍華町1～2丁目・北龜井町1～3丁目、および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目に当たり、東西1.8km、南北1.7kmの範囲に展開する縄文時代晚期以降の複合遺跡である。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた沖積地に位置する。

久宝寺遺跡の南部を横断する形で占地している旧国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)とその周辺においては、平成9(1997)年度以降、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、新設道路部分および公共施設建設地を中心とした発掘調査が、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター)・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当調査研究会とする)により継続的に実施されている。

久宝寺遺跡における既往の調査の概要、および久宝寺遺跡を巡る地理的・歴史的環境については、本書「I 久宝寺遺跡第25次調査」第2章(3～10頁)を参照されたい。

今回の調査地周辺において当調査研究会が実施した既往の調査成果について概観すると、第46次調査(KH2002-46)では、古墳時代中期に比定される畦畔、古墳時代後期以降に比定される自然河道、平安時代中期以前に比定される耕作に伴う溝群、中世の生産域に伴う溝群が検出されて



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

いる。第55次調査(KH2003-55)では、古墳時代初頭後半に比定される水田・畦畔・畦畔状遺構が検出されている。第58次調査(KH2004-58)では、奈良時代から平安時代中期に比定される耕作に伴う溝群、平安時代後期から鎌倉時代に比定される柱根・根石を伴う小穴等が検出されている。そして、それぞれの調査では自然河川に堆積した砂層の広がりが確認されている。

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第60次調査(KH2004-60-1~3)は、区画道路3号線外工事に伴い実施したものである。

調査地は、八尾市北亀井町3丁目の南北に伸びる道路の東側部分で、この道路は大阪市平野区加美南4丁目との境界に当たる(第1図)。調査面積は延べ51.1m<sup>2</sup>を測る。

現地調査は、都市基盤整備公団関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)と八尾市教育委員会と当調査研究会の3者による「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、独立行政法人都市再生機構西日本支社と当調査研究会による業務委託契約書の締結後、平成16年10月7日に着手し、平成16年10月21日に終了した。内業整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成16年10月29日に終了した。

調査に際しては八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+7.85m前後)下1.2mを機械掘削の対象範囲とし、以下0.3mについては人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査地は南北に細長い1本の帯状を呈するが、2本の現行の電柱を挟んでいたために、電柱部分とその周辺を避けて、3つ

の調査区に分割し調査せざるを得なかった。3

つの調査区は、北側から久宝寺遺跡第60次-1

調査区(KH2004-60-1)・2調査区(KH2004-60-2)・3調査区(KH2004-60-3)と

呼称し、1調査区・3調査区・2調査区の順序

で調査をした(第2図)。

調査地の地区割については、竜華操車場跡地

とその周辺において継続する調査に対応するた

めに、平成9年度に当調査研究会が設定したも

のを使用した。地区割の設定については、本書

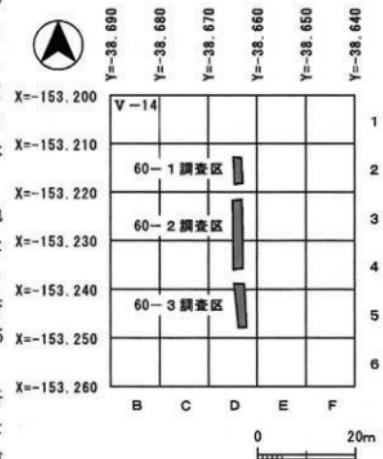
「I 久宝寺遺跡第25次調査」第3章第1節(P15 X=-153.250

~16)を参照されたい。

遺構検出面の呼称については、機械掘削が終

了し、人力掘削による調査で遺構が検出された

面を「第1面」と呼称し、以下、上位の遺構検



出面から順に番号を付した。遺構名については、第2図 調査区設定図および地区割図(S=1/1000)

遺構略号+遺構検出面番号+遺構番号(2桁)で表現した(例、SD101=第1面検出の溝1)。

調査の結果、3調査区第1面で近世以降に比定できる溝、2調査区第2面で中世に比定できる溝群を検出した。出土遺物は、すべて土器の細片で整理用コンテナ(縦60cm×横40cm×深さ15cm)1箱に収まる。

## 第2節 層序

今回の調査地では、現代の建築物の建設や土地造成による搅乱をあまり被っておらず、現代までの各時期の地層が、比較的良好に残されていた。

0-2層は、ビニール製品・ゴム製品・現代ガラス製品を含む客土・盛土である。昭和36年大阪府測量の地図によると、本調査地を含む道路部分に用水路があったことが確認でき、昭和36年以降に盛土されたことがわかる。0-1層は、灰白色を呈する極粗粒砂～粗粒砂で、盛土された以降に掘られた搅乱の埋土である。1層は、盛土される直前までの旧水田耕作土で、2層は、それ以前の水田耕作土である。3層は、1調査区南壁の一部に見られ、断面が皿形を呈することから、4-1層上面を検出面とする遺構埋土の可能性がある。4-2層は、4-1層より混じる砂の量が少なく、3調査区の南壁にのみ見られる。4-2層から土器の破片が僅かに出土したが、その時期は比定できない。5層は、1調査区南壁にのみ見られ、その上面の高さは、他壁の6層の上面とほぼ同じであることから、6層の上面を検出面とする遺構埋土の可能性がある。6層は、粗粒の砂が少量混じる粘土質シルトないしシルト質粘土層で、その上面は既往の第46・55・58次調査で奈良時代～鎌倉時代に比定される遺構が検出された遺構面に相当する。7層は、粗粒の砂層で2・3調査区に見られ、第46・55・58次調査で検出された自然河川に堆積した砂層に相当する。8層は、細粒の砂で、1調査区にのみ見られ、自然河川の氾濫によって河川の外側にオーヴアーフローした砂と考えられる。9層は、1調査区でのみ見られる粘土層で、自然河川のベース層と考えられる。植物遺体などは見られない。

今回の調査では、遺物の出土は僅かで、各層の時期を明確に比定できないが、周辺調査地の地層との対比から、9層～7層が古墳時代後期、6層が古墳時代後期以降古代(奈良～平安時代中期)以前、5層～3層が平安時代後期・鎌倉時代以降、2層が近世以降に比定できる。

0-1層：搅乱埋土(2.5Y7/1灰白色極粗粒砂～粗粒砂)。

0-2層：客土・盛土。

1層：5GY2/1オリーブ色極粗粒砂～粗粒砂混じる粘土質シルト。グライ化。

2層：5GY3/1暗オリーブ色極粗粒砂～粗粒砂混じる粘土質シルト。グライ化。

3層：7.5Y4/1灰色極粗粒砂～粗粒砂混じるシルト。管状酸化鉄。1調査区南壁にのみ見られる。

4-1層：5Y4/2灰オリーブ色細粒の中疊～細疊混じる極粗粒～粗粒砂質粘土質シルト。管状酸化鉄。上面は第1面。

4-2層：5Y4/2灰オリーブ色中粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。管状酸化鉄・酸化マンガン斑。

5層：5Y4/2灰オリーブ色細疊混じる砂質粘土質シルト(上部になるほど、細疊～粗粒砂が多く混じる)。管状酸化鉄・酸化マンガン斑。

6 層：5Y4/2灰オーリープ色極粗粒砂～粗粒砂少量混じる粘土質シルト～シルト質粘土。

管状酸化鉄・酸化マンガン斑。上面は第2面。

7-1層：7.5Y5/1灰色極粗粒砂～粗粒砂。部分的に、7.5Y4/1灰色シルト質細粒～極細粒砂の葉層を挟む。湧水のため全体的な堆積構造は不明。

7-1層：7.5Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂。平行葉理が見られる。

8 層：7.5Y4/1灰色粘土。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1面〉

3調査区の2層を除去した4-1層上面(T.P.+6.8m)で溝1条(S D101)を検出した。

S D101

V-14-5D地区で検出した。検出長0.8m・最大幅0.27m・深さ0.1mを測る。埋土は、5GY3/1暗オーリープ灰色極粗粒砂～粗粒砂混じる粘土質シルト(2層)である。北東～南西方向に伸びる。北東側・南西側は調査区外に至るため、全体の形状は不明である。溝の東肩に当たる南東側も調査区外に至るため、溝の幅は明確ではないが、下端部分が両側検出されていることなどから、約0.3mに復元できる。出土遺物はなく、帰属時期は明確に比定できないが、埋土である2層が近世以降の水田耕作土と捉えられることから近世以降に比定できる。水田耕作に伴い耕盤に掘り込まれた鋤溝と考えられる。

#### 〈第2面〉

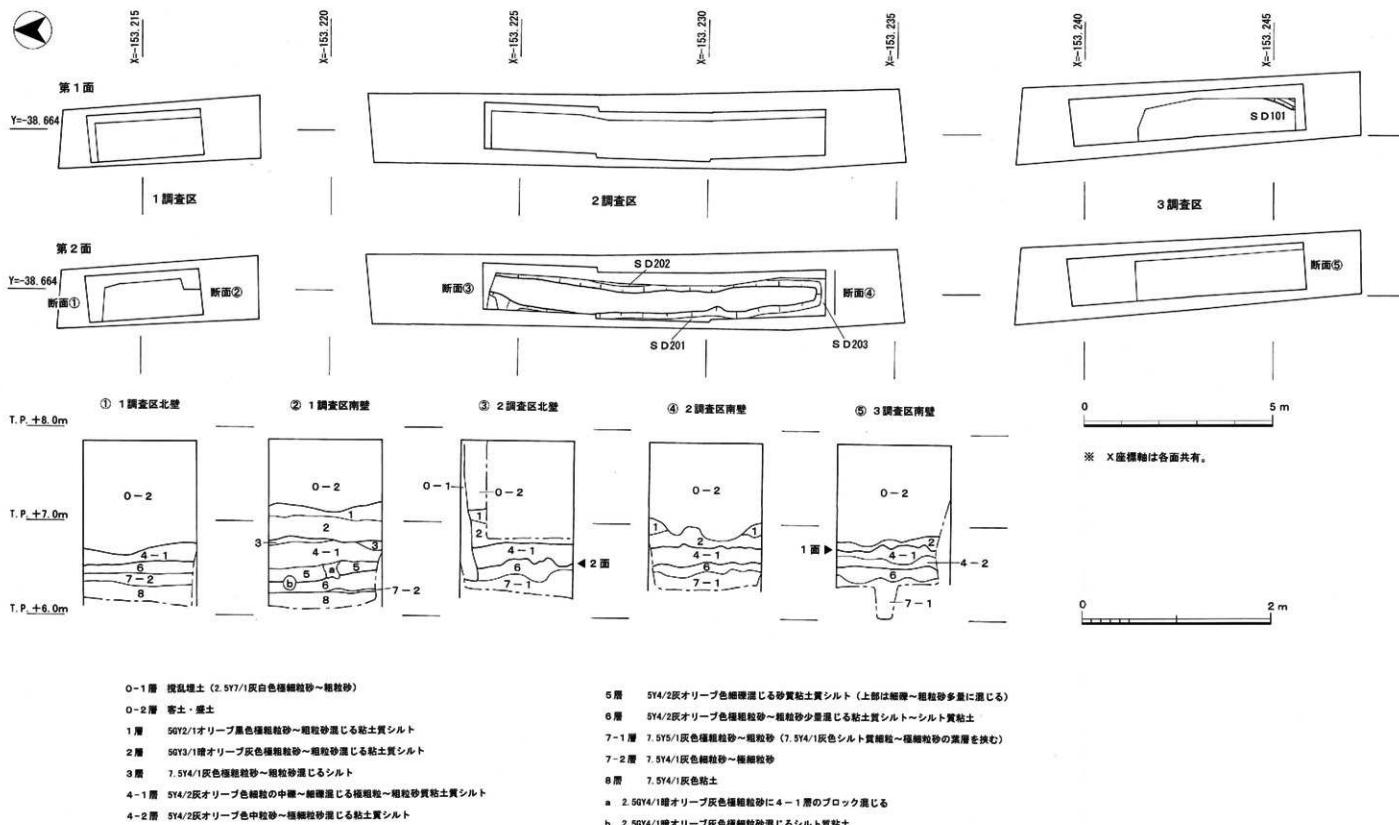
2調査区の4-1層を除去した6層上面(T.P.+6.6m)で溝群1(S D201～203)を検出した。本調査区の第2面は、第58次調査で、奈良時代から平安時代中期に比定される耕作溝群と平安時代後期から鎌倉時代に比定される柱穴が検出された第1面に相当する。

溝群1(S D201～S D203)

V-14-3・4D地区で検出した。東西に伸びる1条の溝(S D203)と、これに直交する2条の溝(S D201・202)からなる。溝群を構成する各溝の法量については、第1表に記載している。埋土は、5Y4/2灰オーリープ色細粒の中疊～細疊混じる極粗粒～粗粒砂質粘土質シルト(4-1層)である。各溝からの出土遺物はない。調査区が細長く狭いために溝群と各溝の全体の規模は不明であるが、検出した部分の形状から横状を呈する溝群であることが窺える。推測される溝の幅が比較的広いことと横状を呈することから歛間溝と考えられるが、歛として機能していた面は、検出面より上位の4-1層中にあったと考えられる。帰属時期については、近接する第58次調査で検出された耕作溝群は、奈良時代から平安時代中期に比定されているが、当調査地で検出した溝群は、機能面が4-1層中にあったと考えられることから、中世に下ると考えられる。

第1表 溝群1(S D201～S D203)法量表(単位m)

遺構名	地 区	検出長	最大幅	深さ
S D201	V-14-3・4D	8.7	0.45	0.1
S D202	V-14-3・4D	8.5	0.25	0.1
S D203	V-14-4D	1.0	0.25	0.1



第3図 検出構造平面図 (S=1/100) および断面図 (S=1/40)

## 第3章 まとめ

今回の調査地は、東西幅1.2mほどで南北に細長く、面として検出できる部分はわずかであったが、2調査区の第2面で中世に比定できる畝間溝群を検出した。当調査地の第2面は、南東側の第58次調査地で奈良時代から平安時代中期に比定される耕作に伴う溝群と平安時代後期から鎌倉時代に比定される柱穴群が検出された第1面に相当する。第58次調査で検出された柱穴群が、当該期の居住域と認められるならば、当調査地で検出した畝間溝群は、それと関連する生産域であった可能性があり、景観復元を考える際の居住域と生産域の領域を窺い知る上で、興味深い成果を得られることとなった。

3調査区の第1面では溝1条を検出した。出土遺物はなく、帰属時期を明確に比定できないが、近世以降の水田耕作に伴う溝と考えられる。これらのことから、当調査地が、中世以降現代になって盛土されるまで、ほぼ継続的に生産域として利用されていたことが窺える。

そして、今回の調査では、既往の第46・55・58次調査において検出された自然河川および自然河川に伴う砂層の広がりを確認した。この砂層の広がりは、2・3調査区で見られ、3調査区の南壁で層厚0.45m以上あることを確認している。一方、1調査区では、層厚0.15m未満の細粒砂～極細粒砂層で、自然河川の氾濫によって河川の外側にオーヴァーフローした砂と考えられことから、自然河川の岸を平面的に検出していないが、自然河川は当調査地では南東～北西方向に伸びていたと推測される。河川の埋没・洪水による地形の変化はヒトの土地利用に大きな影響を与えるため、これらのデータを収集し、どのような変遷を経たのかを知る必要がある。

今回の調査と周辺の調査において検出された河川と河川埋没後の奈良時代から中世にかけての一連の遺構群は、今後周辺で行われる調査で検出される遺構群の領域とその変遷を知る上で、大きな材料となるであろう。

なお、機械掘削中に2調査区の西壁で木製の杭と矢板を確認した。今回の調査地は八尾市と大阪市の境界のすぐ内側に当たるが、昭和36年大阪府測量の地図によると、両市の境界に用水路があったことが確認でき、今回確認した木製の杭と矢板は、この用水路の護岸のために打設されたものと考えられる。

### 註記

註1 第46・55・58次調査の調査成果の詳細については、本書掲載。

### 参考文献

#### ●層序の記載に関する用語・区分について

- ・堆積学研究会編 1998『堆積学辞典』(株)朝倉書店
- ・William J. Fritz & Jonnie N. Moore著、原田憲一訳 1999『層序学と堆積学の基礎』(株)愛智出版



# 図版



調査地全景（南から）



1 調査区全景（南から）



2 調査区全景（南から）



2 調査区 北壁 (S D201・202) 断面 (南から)



3 調査区 全景 (南から)



3 調査区 S D101検出状況 (南西から)

VII 久宝寺遺跡第61次調査（K H2004-61）

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市北龜井町3丁目地内で実施した大阪竜華都市拠点地区2号街区公園防火水槽設置工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第61次調査(KH2004-61)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が独立行政法人都市再生機構西日本支社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年11月9日～平成16年12月15日(実働21日)にかけて荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は93.6m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査においては、伊藤静江・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・田島宣子・永井律子・中村百合・村井俊子・山内千恵子・吉川一栄・若林久美子が参加した。
1. 内業整理においては、垣内・加藤・永井・山内の協力を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成17年3月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレースー荒川、遺物写真撮影ー垣内が行った。
1. 本書の執筆・構成は、荒川が行った。
1. 基準点測量は、(株)かんこうに委託した。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からの協力を受けた。  
独立行政法人都市再生機構西日本支社、(株)島田組
1. 本文作成において参考とした文献については、165頁に提示した。

## 本 文 目 次

第1章 調査に至る経過 .....	153
第2章 調査概要 .....	154
第1節 調査の方法と経過 .....	154
第2節 層序 .....	155
第3節 検出遺構と出土遺物 .....	160
第3章 まとめ .....	164

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	.....	153
第2図	調査地位置図および地区割図	.....	155
第3図	西壁・北壁断面図	.....	157-158
第4図	検出遺構平面図	.....	161
第5図	S K301平断面図	.....	162
第5図	S D301断面図	.....	163
第7図	亀井北遺跡の地層との対比図	.....	166

## 図 版 目 次

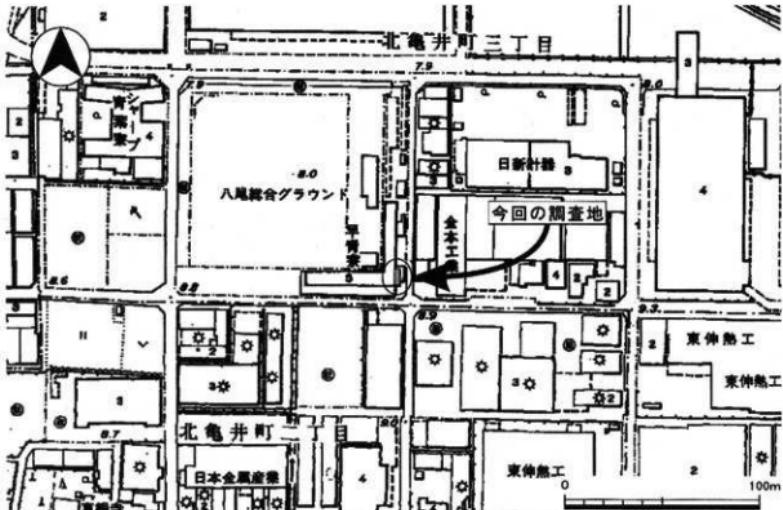
図版一	機械掘削風景
	北壁下段部分
図版二	第2面全景
	流路201および足跡検出状況
図版三	第3面全景
	S K301検出状況
図版四	S D301検出状況
	S D301断面
図版五	第4面全景
	調査風景
図版六	N R101砂礫層出土木製品

## 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、八尾市北西部を中心とする東西1.8km、南北1.7kmの広範囲に及ぶ縄文時代晚期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・龍華町1～2丁目・北亀井町1～3丁目、および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目が遺跡の範囲である。南は跡部遺跡・亀井遺跡、西は亀井北遺跡・加美遺跡、北は佐堂遺跡と隣接し、遺跡範囲内には、久宝寺寺内町遺跡・渋川廃寺が所在する。

久宝寺遺跡が立地する中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部に当たり、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下している。久宝寺遺跡は、旧大和川水系のうち旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた沖積地に展開する遺跡で、遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P. +6.6～12.0mを測る。

今回の調査地は、久宝寺遺跡の南部に当たり、遺跡を東西に横断する形で占地している旧国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)とその周辺を含む「大阪竜華都市拠点地区」の範囲内にある。「大阪竜華都市拠点地区」においては、平成9(1997)年度以降、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点地区画整理事業」の一環として、新設道路部分および公共施設建設地を中心とした発掘調査が、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター。以下、府センターとする)・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当調査研究会とする)によって継続的に



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

実施されている。

本書で報告する久宝寺遺跡第61次調査(KH2004-61)は、上記事業の一環として、当調査研究会が、独立行政法人都市再生機構西日本支社の委託を受けて実施したものである。

久宝寺遺跡における既往の調査の概要、および久宝寺遺跡を巡る地理・歴史的環境の詳細については、本書「I 久宝寺遺跡第25次調査」第2章(3~10頁)を参照されたい。

今回の調査地周辺において当調査研究会が実施した既往調査の成果について概観すると、第25次調査(KH98-25)では、古墳時代初頭から前期の畑作に関連すると推定される溝群、古墳時代後期初頭の水田といった生産関連遺構が検出されている。第36次調査(KH2000-36)でも畦畔状遺構が検出されたが、この畦畔状遺構は、第25次調査で検出された古墳時代後期の水田畦畔に続くもので、生産域の南側への広がりを確認できる遺構である。さらに、第37次調査(KH2001-37)では、古墳時代初頭の耕作に伴う溝群、礎板を伴う小穴・土坑、古墳時代前期の方墳、耕作に伴う溝群、古墳時代後期初頭の畦畔・盛土状遺構・落ち込み、古墳時代後期から奈良時代の水田、中世の畝状遺構群、中世から近世の畦畔が検出された。古墳時代前期の方墳は、当該時期の墓域の南縁辺に当たるものと考えられており、古墳時代後期の盛土状遺構は、当該時期における耕作地の北東の縁辺に当たるものと推定されている。そして、第25次・第36次調査では、上に述べた遺構・遺物の他に古墳時代前期後半までに埋没した自然河川に堆積した砂層が検出されている。

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第61次調査(KH2004-61)は、2号街区公園防火水槽設置工事に伴い実施したものである。

調査地は、八尾市北龜井町3丁目の社員寮の跡地部分で(第1図)、南北に長辺を持つ長方形を呈し、調査面積は93.6m<sup>2</sup>を測る。

現地調査は、都市基盤整備公團関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)と八尾市教育委員会と当調査研究会の3者による「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、独立行政法人都市再生機構西日本支社と当調査研究会による業務委託契約書の締結後、平成16年11月9日に着手し、平成16年12月15日に終了した。内業整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成17年3月28日に終了した。

現地調査に際しては八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+8.18m前後)下1.8mを機械掘削の対象範囲とし、以下2.5mについては人力掘削を行った。

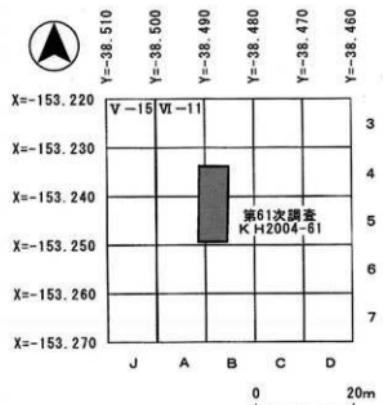
なお、調査区の北側と西側に地層観察用の壁(上幅0.5m)を設定し、地層の記録保存を行なった。その際、壁の崩落を予防し、法面の勾配を付けることによって生じる遺構検出面積の減少を回避するため、壁を上下2段に分け、上段部分の地層断面を記録した後、上段部分を人力掘削によって除去し、再び上幅0.5mで下段の壁を設定し、下段部分の地層断面を記録した。

調査地の地区割については、竜華操車場跡地とその周辺において継続する調査に対応するために、平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した。地区割の設定については、本書「I

久宝寺遺跡第25次調査」第3章第1節(15~16頁)を参照されたい。今回の調査地は、この地区割では、VI-11-4 A・B、5 A・B地区の境界付近に位置する(第2図)。

遺構検出面の呼称については、機械掘削が終了し、人力掘削による調査で遺構を検出した面を「第1面」と呼称し、以下、上位の遺構検出面から順に番号を付した。遺構名については、遺構略号+遺構検出面番号+遺構番号(2桁)で表現した(例、N R 101=第1面検出の自然河川1)。

調査の結果、弥生時代前期に比定できる谷状の落ち込み、弥生時代中期に比定できる溝・土坑、弥生時代中期から後期に比定できる路路、古墳時代前期後半までに埋没した自然河川の河床と河川に堆積した砂礫層を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(縦60cm×横40cm×深さ20cm)1箱を数え、その内訳は、自然河川の砂層から出土した木製品・加工木・流木が殆どで、それ以外では、土器が破片で数点出土したのみである。



第2図 調査位置図および地区割図(S=1/1000)

## 第2節 層序

機械掘削範囲内である現地表下1.8mまでは、殆ど既存建物の撤去に伴う工事による搅乱を受けており、コンクリート片・現代ガラス片が多く含む砂礫を主体とする0層が堆積している。搅乱は場所によっては4~2層まで及んでいる。そのため、周辺の調査地で検出されている奈良・平安時代以降、既存建物撤去時までの各時期の地層・遺構は残っていなかった。

今回の調査地における1層以下の地層は、概ね粘土・粘質土を主体とする湿地・湖沼堆積物と、砂礫・砂質土を主体とする河川堆積物・路路充填堆積物からなり、粘土・粘質土を主体とする各地層の中には、府センターが調査を実施した200m余り西方に位置する龟井北遺跡(その2調査区)の地層と対比できるものが見られる。

2~2層は、龟井北遺跡の調査において確認されている植物遺体を多量に含む層に対比できるもので、当調査地周辺の第25・36・37次調査地においても確認されており、当調査地周辺から龟井北遺跡にかけての鍵層となっている。第25次1~3調査区・第36次1調査区・第37次1調査区においては、この層を除去した面から、古墳時代後期初頭に比定される水田・畦畔状遺構が検出されているため、当調査地においても2~2層を除去した3層上面で遺構の検出を試みたが、遺構は検出されず、地層断面にも畦畔などの人為的な遺構を示すものは確認できなかった。

西壁断面で、4~1層が3層を貫く砂脈を確認した。西壁部分では既存建物の撤去に伴う搅乱によって、その上部が削平されており、噴砂が見られる面を確認できなかったが、搅乱埋土である0層を除去する時に、搅乱の側壁でも別の砂脈を確認しており、この部分では、3層上面に流

出する噴砂と噴砂を覆う2-2層を確認している。

4-1層から4-3層は、第25次・第36次調査で検出されている古墳時代前期後半までに埋没した自然河川に堆積した砂礫層に相当する。

12-1・12-2層と14層は、次節で述べるように、人為的な手が加えられていることが明瞭な搅拌層・整地層である。

16層以下は、見た目が暗灰色の粘土・粘質土と見た目が暗緑色の粘土・粘質土が交互に堆積しており、亀井北遺跡(その2調査区)の黒色帶・緑色帶と対比できる。23・24層からは、粗製の深鉢の口縁部を含む縄文土器の破片が数点出土している。

0層：コンクリート片・現代ガラス片を多く含む砂礫主体層。既存建物の撤去に伴う盛土・搅乱埋土。

1-1層：7.5Y3/2オリーブ黒色極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層とシルト質極細粒砂の葉層の不明瞭な互層。植物遺体を極少量含む。

1-2層：10Y4/1灰色極細粒砂の葉層と7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルトの葉層の不明瞭な互層。植物遺体を極少量含む。

1-3層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。10Y4/1灰色極細粒砂の葉層を数層挟む。

2-1層：10Y4/1灰色粘土。水平葉理が見られる。植物遺体を含む。

2-2層：2.5Y3/1黒褐色粘土。分解の進んだ植物遺体の葉層を幾重にも含み、7.5Y4/1灰色粘土の薄層を挟む。

3層：2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土。土壤化が著しく、多量の植物遺体(主に草)・炭酸鉄の団塊を含む。土壤化の及んでいない下部は、7.5Y4/1灰色を呈する。

4-1層：10Y5/1灰色極粗粒砂～極細粒砂(極粗粒砂～中粒砂と細粒砂～極細粒砂の葉層・薄層の不明瞭な互層)。平行層理が見られる。木本の植物遺体を含む。N R 101埋土。

4-2層：10Y5/1灰色細縞～極細粒砂(細縞～中粒砂と細粒砂～極細粒砂の薄層の互層)。上に凸状の両側へ下がる平行層理、その外側に平板型斜行層理が見られる。単層の厚さは概ね5cm以内。木本の植物遺体を含む。N R 101埋土。

4-3層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒砂～極細粒砂。平行葉理が見られる。調査区西端の南側では、厚くなり平板型斜交層理が見られ、10Y5/1灰色極粗粒砂～細粒砂との互層をなす。植物遺体を少量含む。4-2層との間に植物遺体の葉層を挟む。N R 101埋土。

5-1層：5Y4/1灰色シルト質粘土。平行葉理が見られ、上部にはシルト～粘土質シルトの葉層を挟む部分が見られる。植物遺体(主に草)を含む。上面は第1面(N R 101河床)。

5-2層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。平行葉理が見られる。

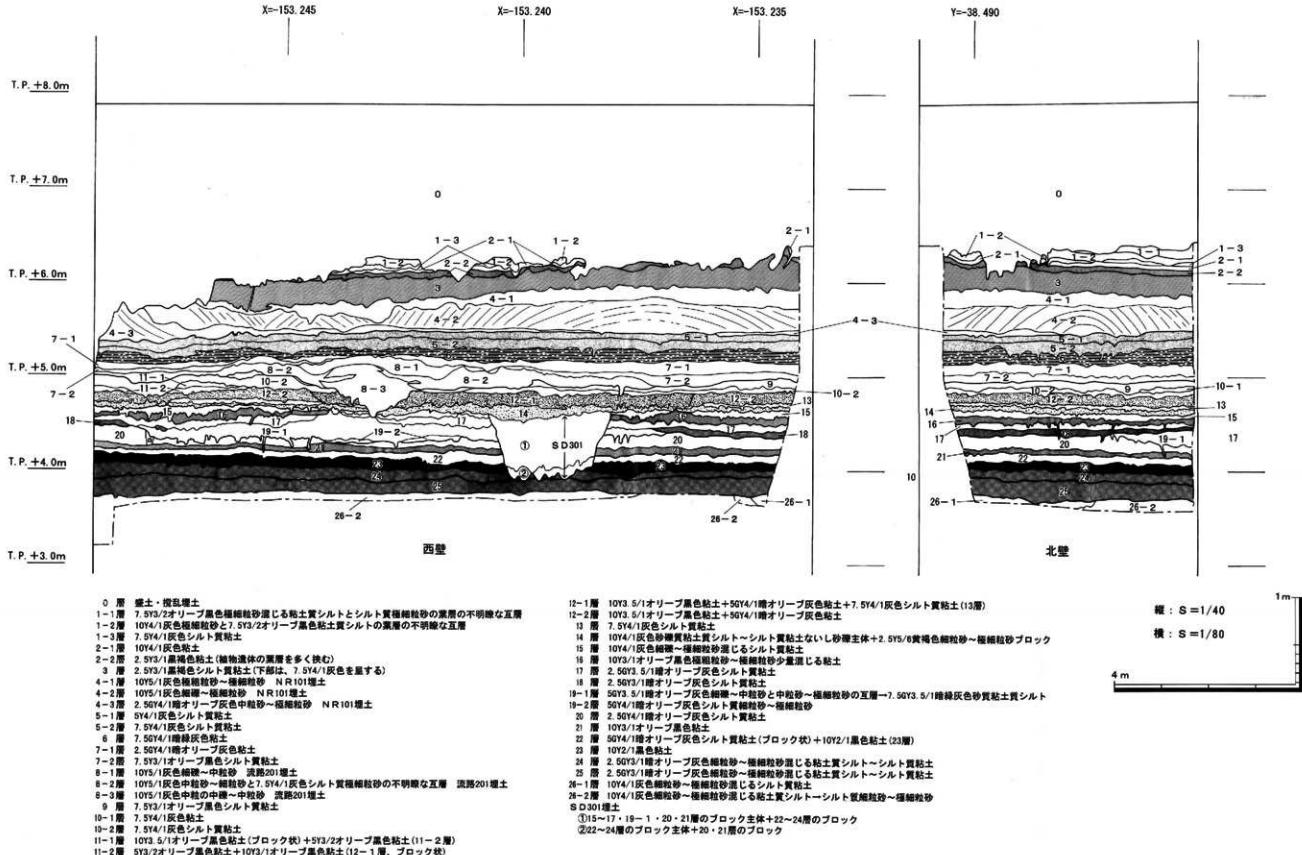
6層：7.5GY4/1暗緑灰色粘土。炭酸鉄の団塊を多く含む。

7-1層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。植物遺体を含む。上部に炭酸鉄の団塊を極少量含む。

7-2層：7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。植物遺体(主に草)を少量含む。

8-1層：10Y5/1灰色細縞～中粒砂。7.5Y4/1灰色シルト質極細粒砂の葉層を挟み平板型斜交層理をなす部分が見られるが、それ以外では明瞭な層理は見られない。流路201埋土。

8-2層：10Y5/1灰色中粒砂～細粒砂(未分解の木本の細かい植物遺体を含む)と7.5Y4/1灰色シルト質極細粒砂の不明瞭な互層。部分的に10Y5/1灰色極粗粒砂～中粒砂の薄層を挟む。流



第3図 西壁・北壁断面図

## 路201埋土

- 8-3層：10Y5/1灰色中粒の中礫～中粒砂。明瞭な層理は見られない。流路201埋土。
- 9 層：7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。植物遺体(主に葦)を含む。平行葉理が見られ、所により極細粒砂～粘土質シルトの葉層と互層をなす。上面は第2面。
- 10-1層：7.5Y4/1灰色粘土。植物遺体(主に葦)を少量含む。
- 10-2層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。所により植物遺体(主に葦)を含む。上面の一部は第2面。
- 11-1層：10Y3.5/1オリーブ黒色粘土のブロック主体(概ね、中粒の中礫大)で、ブロック間を5Y3/2オリーブ黒色粘土(11-2層)が充填する。11-2層との間に植物遺体の葉層を挟む。
- 11-2層：5Y3/2オリーブ黒色粘土。10Y3/1オリーブ黒色粘土(12-1層)のブロックが混じる。有機質に富む。下部の窪んだ部分には水平葉理が見られる。
- 12-1層：10Y3.5/1オリーブ黒色粘土と5GY4/1暗オリーブ灰色粘土と13層が混じる。全体として7.5Y4/1灰色を呈する。植物遺体を多く含む。植物遺体は12-2層に比べて多い。
- 12-2層：10Y3.5/1オリーブ黒色粘土と5GY4/1暗オリーブ灰色粘土が混じる。下部は5GY4/1暗オリーブ灰色粘土が主体となる。植物遺体を多く含む。
- 13 層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。植物遺体(主に葦)を少量含む。
- 14 層：10Y4/1灰色砂礫質(細礫～極細粒砂)粘土質シルト～シルト質粘土。所により砂礫主体で、粘土質シルト～シルト質粘土と2.5Y5/6黄褐色細粒砂～極細粒砂のブロックが混じる。植物遺体を僅かに含む。
- 15 層：10Y4/1灰色細礫～極細粒砂混じるシルト質粘土。上面は第3面。
- 16 層：10Y3/1オリーブ黒色極粗粒砂～極細粒砂少量混じる粘土。S O401の埋土の上では薄く、見られないところもある。
- 17 層：2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。S O401の埋土の上では細礫～極細粒砂混じり。
- 18 層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。S O401の埋土の上では殆ど見られず、中粒砂～極細粒砂混じり。
- 19-1層：5GY3.5/1暗オリーブ灰色細礫～中粒砂と中粒砂～極細粒砂の互層。平板型斜交層理が見られる。層理が見られないところでは、細礫～粗粒砂。S O401の肩に近くなるほど泥質が増し、7.5GY3.5/1暗緑灰色中粒～極細粒砂質粘土質シルトに漸移する。S O401埋土。
- 19-2層：5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質細粒砂～極細粒砂。S O401埋土。
- 20 層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。炭酸鉄の団塊を多く含む。S O401の底面に当たる部分には、動物の足跡・創痕・巣穴が多く見られる。上面は第4面。
- 21 層：10Y3/1オリーブ黒色粘土。10Y2/1黒色粘土を粒状に多く含む。
- 22 層：5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。丸みを帯びた粒状・ブロック状( $\sim \phi$ 数cm)で、ブロック間を23層が充填する。
- 23 層：10Y2/1黒色粘土。上面に動物の創痕が見られる。
- 24 層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土。調査区北壁東側では細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。

- 25 層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色(24層より明るい)細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土。調査区北壁東側では細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。調査区南側では、炭酸鉄の團塊が多く含む。
- 26-1層：10Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土。層中に25層で充填された動物の巣穴見られる。
- 26-2層：10Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト～シルト。下位に行くほど粗粒になり、シルト質細粒砂～極細粒砂となる。層中に25層で充填された巣穴が見られる。なお、25層と26-1・26-2層との境界は明瞭ではなく、混ざり合った様相を呈する。
- S D 301埋土
- ①15～17・19-1・20・21層のブロックを主体とし、22～24層のブロックが混じる。ブロックの大きさは、径2.0～20.0cm。
- ②22～24層のブロックを主体とし、20・21層のブロックが混じる。ブロックの大きさは、径2.0～15.0cm。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1面〉

5-1層上面(T.P.+5.3～5.5m)で、自然河川(N R 101)の河床を検出した。

#### N R 101

調査地全域で確認された河川堆積の砂礫層である4-1～4-3層が堆積する部分(T.P.+5.9～5.45m)をN R 101とした。河川の岸は調査地外に当たるため、検出できなかった。河床面は調査地の北東部が高く、南西部が低くなっている。約0.2mの比高差がある。N R 101に堆積する砂礫層については、「第2節層序」の4-1～4-3層に記載している。

4-1・4-2層からは、主に調査地の南側で、砂礫とともに上流から流されてきた板状の木製品・棒状の木製品(図版六)・加工痕のある木・流木が出土している。木製品の用途は不明である。N R 101に堆積する砂礫層は、第25次調査地・第36次1・2調査区で検出されている自然河川に堆積した砂礫層に相当する。形成時期については明確にできないが、第25次3調査区で、これらの砂礫層が堆積した後、砂礫層を覆う粘土質土が堆積するまでの間に掘削された遺構の埋土から、古墳時代前期後半(布留式新相)の甕が出土していることから、古墳時代前期後半には埋没していたと考えられる。

#### 〈第2面〉(第4図、図版二)

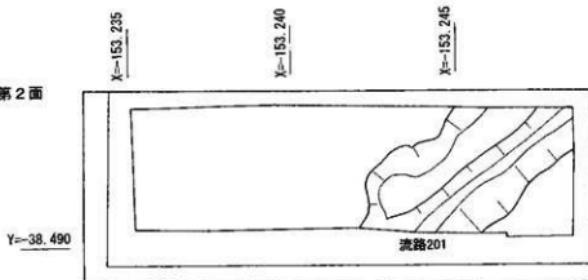
9層(一部、10-2層)上面(T.P.+4.95m前後)で、流路1条(流路201)を検出した。

#### 流路201(図版二)

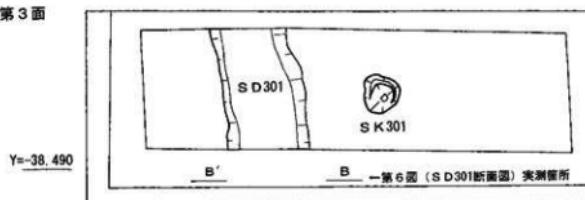
VI-11-5 A・B地区、調査地の南側で検出した。南東-北西方向に伸び、南東部と北西部は調査地外に至る。規模は検出長7.5m、幅3.0～3.7m、検出面からの深さ約0.5mを測る。埋土については、「第2節層序」の8-1～8-3層に記載している。8-2層は、流路の埋没過程で流路の外側に堆積した中粒砂～細粒砂である。流路の南縁には1.5～2.0mの幅で直線的に伸び、断面形状が緩やかなV字を呈する流芯部があり、この部分を中心にヒト・偶蹄類・鳥類の足跡を検出した。埋土から人工遺物は出土していない。形成時期・埋没時期は、亀井北遺跡の地層との



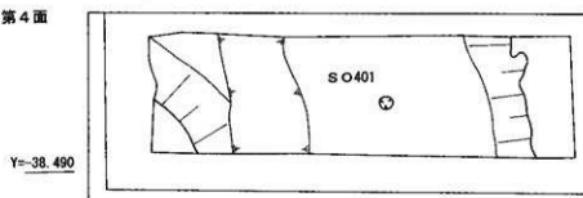
第2面



第3面



第4面



0      10m

第4図 検出遺構平面図 (S=1/150)

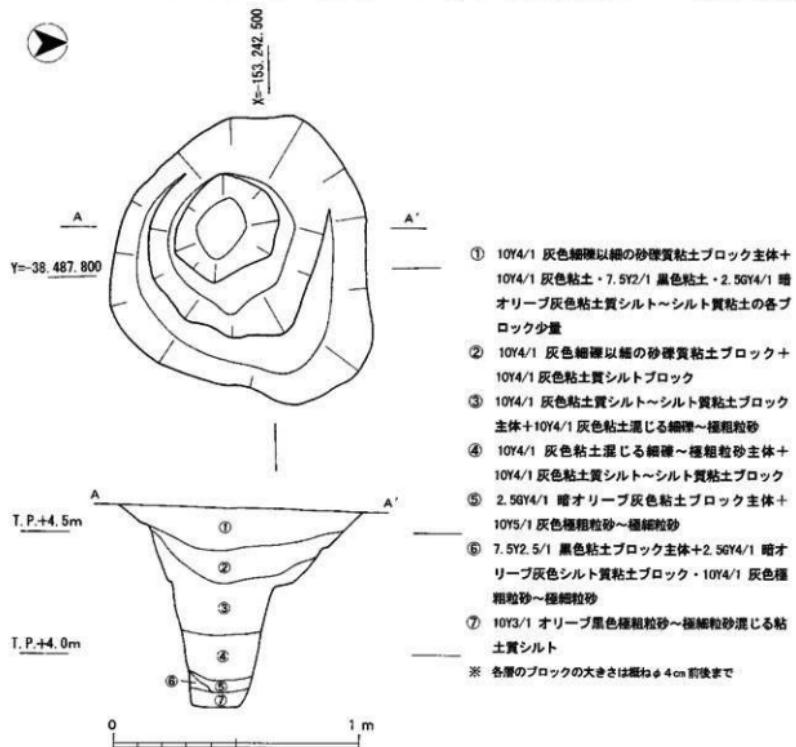
対比から、弥生時代中期から後期にかけてと考えられる。流路201は、流芯部が直線的に伸び、断面形が緩やかなV字を呈することから、自然流路ではなく、自然流路の一部に人为的に手を加えたか、人为的に掘削して作られた流路と推測できる。流路201が砂礫で充填されていることは、当調査地の周辺に、流路201に繋がり、砂礫を運搬し堆積させ得る本流路(河川)があったことを示唆している。

〈第3面〉(第4図、図版三)

14層を除去した15層(15層が薄い部分では、一部16層)上面(T.P.+4.65m前後)で、土坑1基(S K 301)と溝1条(S D 301)を検出した。

S K 301(第5図・図版三)

VI-11-5 B地区、調査地のほぼ中央で検出した穴である。平面形は不規則円形で、長径1.2m・短径1.15m・深さ0.85mを測る。埋土については、第5図に記載しているが、最下層が締まりのある極粗粒砂～極細粒砂が混じる粘土質シルトで、その上位層は造構のベース層である砂礫



第5図 S K 301平断面図 (S=1/20)

質土と粘質土のブロックを主体とする6層からなる。埋土からの出土遺物はない。構築時期は、亀井北遺跡の地層との対比から、弥生時代中期と考えられる。

#### S D301(第6図、図版四)

VI-11-4 A・B、5 A・B地区、調査地の北側で検出した。ほぼ東西方向に伸び、東部と西部は調査地外に至る。検出長5.5m・幅2.35~2.6m・深さ0.67mを測る。埋土については第6図に記載しているが、ペース層のブロックを主体とする。埋土からの出土遺物はない。構築時期は、SK301と同様に、弥生時代中期と考えられる。溝の底面上に水成の堆積層や乾痕など、長期間開削された状態にあったことを示す痕跡が見られないことから、掘削した後すぐに掘削した土で埋め戻されたことがわかる。

#### (第4面)(第4図、図版五)

20層上面(T.P.+4.4m前後)で、谷状の落ち込み(S O401)を検出した。

#### S O401

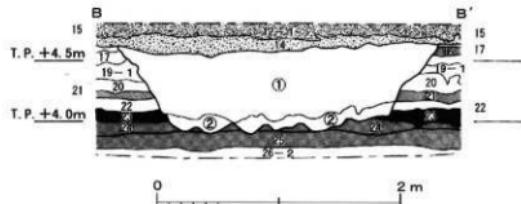
VI-11-4 A・B、5 A・B地区、調査地の北西端・南端を除くほぼ全域で検出した。検出長5.5m・幅10.2m以上・検出面からの深さ0.2mを測る。埋土については、「第2節層序」の19-1・19-2層に記載している。底面から動物の足跡・創痕・巣穴を検出した。埋土からの出土遺物はない。形成時期・埋没時期は、亀井北遺跡の地層との対比から、弥生時代前期と考えられる。

S O401は、主に流水によって運搬されてきた砂礫によって充填されているが、底面に動物の足跡・創痕・巣穴が多く見られることから、埋没が始まるまでは水深の浅い沼沢地であったと考えられる。

#### (12-1・12-2層・14層について)

弥生時代中期から後期に比定できる12-2層は、下部は5GY4/1暗オリーブ灰色粘土を主体とするが、上部は10Y3.5/1オリーブ黒色粘土と混じり合っており、同じく12-1層は、さらに下位の13層を切る形で混じり合っていることから、人為的に搅拌されたことが明らかな層である。また、弥生時代中期に比定できる14層は、砂礫・細粒砂・極細粒砂がブロック状に多く混じる粘質土、ないし、粘質土・細粒砂・極細粒砂がブロック状に混じる砂礫主体の層で、砂礫と細粒砂・極細粒砂を客土として整地されたことが明らかな層である。

14層下面である第3面以外の各層上面ないし下面で造構は検出されなかつたが、各層自体が当該時期のヒトの活動を示すものとして捉えられる。



第6図 S D301断面図 (S=1/40)

### 第3章 まとめ

今回の調査においては、縄文時代から古墳時代にかけての環境・ヒトの活動を知ることができる地層の重なりと遺構・遺物を検出した。

第4面では、弥生時代前期に比定できる谷状の落ち込みを検出した。底面に動物の足跡・匍匐・巣穴が多く見られることから、水深の浅い沼沢地であったと考えられ、ヒトの足跡の検出や人工遺物の出土などが見られないことから、当該時期の当調査地においては、ヒトの積極的な活動はなかったと考えられる。

第3面では、弥生時代中期に比定できる土坑1基と溝1条を検出した。これらの遺構は、埋土の特徴から一時的・短期的に機能を持つものであったと考えられる。

溝については、掘削後すぐに掘削した土で埋め戻されているが、のことと遺物を伴わないことにおいて、同じ特徴を持つ弥生時代前期・中期の溝が、久宝寺遺跡・北龜井遺跡・跡部遺跡・山賀遺跡においても検出されている。

そして、弥生時代中期から後期に比定できる12-1・12-2層・14層については、12-1・12-2層が人為的な搅拌層、14層が整地層である。当該時期の当調査地においてヒトの積極的な活動が行われていたことが窺取できる。14層については、弥生時代中期の溝の埋土とベース層の上面を覆っているが、当調査研究会による跡部遺跡第11次調査で検出された溝も、埋土とベース層の上面を砂礫が多く混じる粘質土層が覆っており、溝との有機的な関連を想定できる。溝および溝の埋土とベース層の上面を覆う層は、その機能・性格についてはわからないが、集団的なヒトの活動によるものである。

第2面では、弥生時代中期から後期に比定できる流路を検出した。人為的に掘削されたと考えられるもので、流路の南縁の深い部分を中心ヒトの足跡を検出していることから、当該時期においてもヒトの活動が行われていたことが窺えるが、調査面積が狭いため、生産活動に伴うものであるのかについては明確にし得ない。

第1面では、古墳時代前期後半には埋没していた自然河川の河床を検出した。この自然河川に堆積した砂層に相当するものは、第25次調査地・第36次1・2調査区でも検出されており、その広がりを確認できた。当調査地においては、今回の調査結果と周辺調査地の調査結果から、東南東-西北西方向に伸びる自然河川の一部で、河道を変えながら埋没して行き、最終的に河川全体を覆う洪水によって埋没したことが窺える。

この自然河川が埋没した後、調査地一帯は湿地となり粘質土が堆積し、周辺の調査地においては、その上面で古墳時代後期初頭以降に比定される水田が検出されている。

#### 註記

- 註1 亀井北遺跡(その2調査区Eトレント南端)と当調査地の地層との対比は、第7図の通りである。  
なお、図中の亀井北遺跡の地層柱状図については、下記参考文献(奥・山上 1985)の「第4図 亀井北遺跡その2調査区標準1層柱状図」に基づいて筆者が作成したが、マンセル記号と色名が異なる部分があるので、本文によって訂正させていただいた。その責は筆者が負うこととする。本文の引用についても同様である。

【2-2層】2-2層は、分解の進んだ多量の植物遺体の葉層を幾重にも含む2.5Y3/1黒褐色粘土層で、

亀井北遺跡の「第IX層（黒褐色有機質土7.5YR3/1）」と対比できる。この層は、当調査地周辺の調査区においても確認されており、亀井北遺跡から当調査地周辺にかけての健層となっている。

【3層】2-2層に覆われた3層は、上部の土壤化が著しい2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土層（下部は7.5Y4/1灰色を呈する）で、亀井北遺跡においては「第IX層」に覆われた「第X層（暗緑灰色粘土層；10G4/1）」と対比できる。同一の地層であるかは断定できないが、当調査地周辺の3層と亀井北遺跡の「第X層」の上面は、同時期の遺構検出面として捉えられる。当調査地周辺の調査区においては、3層と対比できる粘質土層の上面から、古墳時代後期初頭に比定される水田・畦畔状遺構が検出されている。亀井北遺跡においては、「第X層」は「古墳時代中期の水田と推定される古墳時代第3遺構面」のベースとされているが、当調査地周辺では当該層の下位の河川堆積物である砂礫が堆積した後、当該層が堆積するまでの間に掘削された遺構の上から（布留式新相期）の甕が出土していることから、当該層の上面で検出された水田・畦畔状遺構は、古墳時代前期後半以降のものであると考えられる。

【6層】6層は、7.5G4/1暗緑灰色粘土上で、亀井北遺跡の「緑灰色粘土」と対応できる。「緑灰色粘土」は、弥生時代後期の「弥生時代第2遺構面」のベースとなっている。

16層以下は、S O401の埋土である19層を除き、各層の相対的関係が亀井北遺跡の黒色帯・緑色帯の相対的関係と対比できる。

【16層】16層は、10Y3/1オリーブ黒色粗粒砂～極細粒砂僅に混じる粘土層で、亀井北遺跡の「第XⅢ層（黒色粘土10Y2/1）」と対比できる。「第XⅢ層」は、弥生時代中期の「弥生時代第2遺構面」のベースとなっている。

【17・18・20層】17・18・20層は暗オリーブ灰色シルト質粘土であるが、色調が、17層が2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色、18層が2.5GY3/1暗オリーブ灰色、20層が2.5GY4/1暗オリーブ灰色で、見た目には17・20層が暗い緑色、18層が暗い灰色である。亀井北遺跡においては、「層間には厚さ0.05m～0.2mの底灰色粘土（70SG4/1）」〔下線部原文ママ、「暗緑灰色粘土（7.5GY4/1）」か=筆者註〕を挟む「第XⅢ層（緑灰色粘土5G5/1）」と対比できる。「第XⅢ層」は、弥生時代前期の「弥生時代第1遺構面」のベースとなっている。

【21層】21層は、10Y3/1オリーブ黒色粘土で、亀井北遺跡の「第XX層（黒色粘土1N1.5/0）」と対比できる。

【22層】22層は、5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土で、亀井北遺跡の「第XXI層（緑灰色シルト10GY5/1）」と対比できる。

【23層】23層は、10Y4/1黒色粘土層で、亀井北遺跡の「第XXII層（黒色粘土7.5Y2/1）」と対比できる。23・24層からは、時期は明確に比定できないが、粗製の深鉢の口縁部を含む繩文土器と見られる破片が数点出土している。亀井北遺跡においては、繩文時代後期の「繩文時代遺構面」のベースとなっており、自然流路の埋土である砂層の上層から後期後半までの土器片が、下層からは繩文時代中期後半から後期中葉に比定される深鉢が出土している。

【24・25層】24層は、2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土、25層は、2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土層で、亀井北遺跡の「青灰色粘土層」と対比できる。

【26層】26層は、10Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土層で、下位に行くほど粗粒になり、シルト質細粒砂～極細粒砂となる。亀井北遺跡の「灰色シルト層」と対比できる。

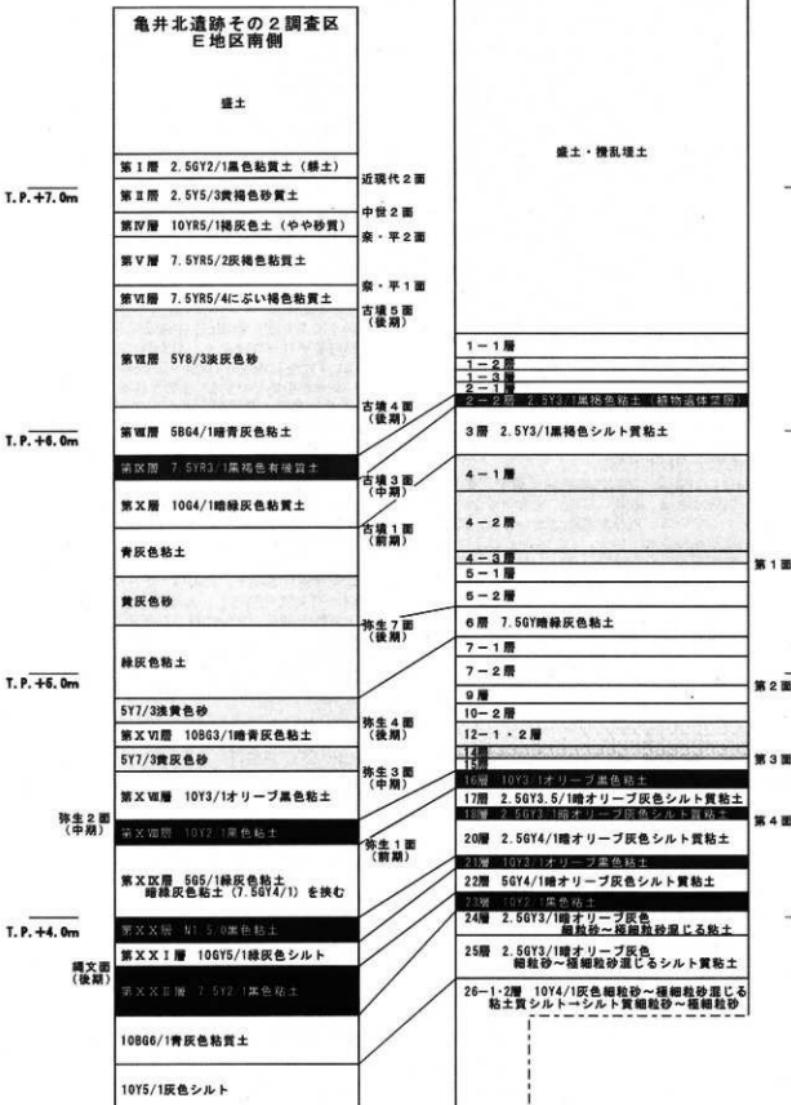
註2 23・24層から出土した繩文土器の破片のうち、粗製の深鉢の口縁部は、厚さが約1cm、色調が10YR5/3に似た黄褐色で、外側ともに削痕が見られ、口縁端部は面取りされていて平坦気味である。

## 参考文献

- 周辺調査区の調査成果について
  - ・坪田真一・原田昌則 2005「I 久宝寺遺跡第25次調査(KH98-25)」本吉掲載
  - ・原田昌則・金親満大 2004「II 久宝寺遺跡第36次調査(KH2000-36)」「III 久宝寺遺跡第37次調査(KH2000-37)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告77」〔財〕八尾市文化財調査研究会
- 亀井北遺跡(その2調査区Eトレレンチ南端)の土層について
  - ・奥和弘・山上正 1985「亀井北(その2)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 弥生時代前期・中期の溝について
  - ・西村歩・奥村茂輝・辻本裕也 2004「久宝寺遺跡・竜谷地区発掘調査報告書VI一大阪竜谷都市拠点地区竜谷東西線建設に伴う発掘調査一」〔財〕大阪府文化財センター調査報告書 第118集
  - ・赤木克視・竹原伸次・大森康宏 1985「亀井北(その3) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
  - ・成海佳子 1997「II跡部遺跡第11次調査(A T93-11)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告58」〔財〕八尾市文化財調査研究会
  - ・田中和弘・岸本道昭 1986「山賀(その5・6)一河内平野における初期農耕遺跡の調査—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 地層の記載に用いた用語について
  - ・堆積学研究会編 1998『堆積学辞典』(株)朝倉書店
  - ・William J. Fritz & Jonnie N. Moore著、原田憲一訳 1999『層序学と堆積学の基礎』(株)愛智出版

T.P.+8.0m

## 久宝寺遺跡第61次



第7図 亀井北遺跡の地層との対比図

# 図版